
クリア-スペル（魔王編）

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリアースペル（魔王編）

【Nコード】

N8880W

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

突然、召喚された。なぜか初対面で「魔王さま」などと呼ばれる。しかも帰る方法は無いときた。そんなめんどくせえこと、誰がするんだ。……私、なのか？

そんなこんなで召喚された、やる気皆無の主人公。そして唯一の帰る手段として示されたのは「魔族を救う事」。体力と柔軟しか自信がない上、成績も中ほど。一応魔法は最強レベルだが、欠点が非常に多い。どこまで微妙なんだ……。それで、そんな私に一体どうしろと？

題名変えました。改題前は『なんか魔王になった。めんどくせえ。』
です。内容は変わりません。勝手に変えてすみません。

第1話（前書き）

思いつきで書き始めました。ご都合主義で、主人公チートです。
おまけに口が悪いうえ、性格も悪い。

そういったものが平気な方は暇つぶしにでもどうぞ。

少し内容を追加しました。話の流れは変わりません。

第1話

私はどこにでもいる、ごく普通の高校生だ。

成績は中の中。運動神経は、体力と柔軟以外は悲惨なもの。容姿は……中の下くらい。まあ、そんなもんだよねと自分を慰めつつ。

コンプレックスは、本心を言えない事。

というか、言ったら友達いなくなるくらい、性格が悪い。今はそこそこ友達いるけどね、本性出したら大変な事になるのは間違いないし。

口癖は「面倒めんどくさい」。

元気はつらつ涔はつらつ渌はつらつ！ という言葉から非常に遠く離れた所に存在している。やる気というモノが存在しない。まあ、なくても死ぬわけじゃないしね。

あー、ニートになりてえ。

口には出せないけど、心の中では常に呟きまくり。

ちなみに、パソコン関係は弱いからツイッターなんて出来ませんぜ。

楽しんで生活できる方法ないかねえ、などと考えていた時だった。

私が、全てを失ったのは。

＊

気が付いたら見慣れない場所にいた。

学校の帰り道。いつも通りコンビニで寄り道をして、週刊誌を適当に立ち読みしてから帰ろうとした時だった。

「……………は？」

思わず素の状態で反応してしまった。

私は今、知らない人どころか、見慣れない人種の人々に囲まれている。

やけに耳が尖っていたり、角が生えていたり、あきらかに人の形をしていない人もいた。動物の形をしていたり、身体が色んな物でつぎはぎされているような人もいる。

ずいぶん前衛的なファッションでございますね。それともあれか？
今はやりのコスプレか？ 実物は初めて見るぞ。

内心で口には出せないような事を呟いていると、私を囲んでいる人垣が割れた。そこから老婆が現れる。老婆ではあるが、受ける印象は不思議と若かった。

背は低い。浅黒い肌をして、髪は純白。耳は尖っていた。杖をついているが、実際は必要が無いんじゃないか、と思うほど姿勢が良い。むしろ私の方がずっと姿勢悪いし。

「誰？」

私は笑顔を浮かべず、不機嫌丸出しで尋ねる。友好的？ そんな言葉は母さんの腹の中に置いてきたさ！ そもそもこんな状況で、無理がある。

「突然お呼びして大変申し訳なく思います」
私は老婆を睨みつけた。

「だから、誰だっつってんだよ。つか、ここどこ」

今回は初めから猫かぶりはなし。下手に出たとしても状況は変わらない。身の保身？ こんな状況で保身に走るのは性しょうに合わないんだよ！ そもそも、この状況で保身に走っても意味ないだろうし。

老婆は恭しく礼をする。

「わたしの名はギゴリア。ここはラントルファイアでございます」
名前からやっぱり外人か、と確認した。それにしても、日本語が話せる人でよかった。……ん？

「そんな国、聞いたことないんだけど。ふざけてる？」
私は地理が非常に疎いが、そんな国が存在しない事は分かる。人を馬鹿にするなよ。

なんて思ったら、このお婆さん。とんでもない事言いやがった。

「突然の非礼、どうかお許しください。……いえ、許してくださいされなくても構いません。

その代わり、どうか魔王さま。我ら魔族をお救いください！」

……………は？

やばい、なんかすごい電波な言葉が聞こえた気がする。幻聴かな？
まだ、そんな年じゃないはずなんだけど……。

こうして私は魔王になった……らしい。少なくとも、ギゴリアたちの中では。

うわっ、めんどくせえ。

第2話（前書き）

内容は変わりませんが、訂正しました。

あと、世界背景はかなりざっくりです。だいたい中世ヨーロッパもどきを想像してください。もどきです。細かい所、かなり違います。

第2話

「魔王？　ずいぶんぶっ飛んだトンデモ設定だな。そういうのは自分たちで楽しむもんだ。勝手に私を巻き込むんじゃねえ」

あまりに一方的な言いがかりに、思わず本心を言ってしまう。例えば本当の事だとしても、そんなものに付き合っているほど暇じゃない。適当に誤魔化してさっさと帰してもらおう。

しかしギゴリアは首を振った。

「残念ですが、召喚された以上は巻き込まれるしかないのです」
「は？　なんで」

私は反射的に聞き返していた。

ギゴリアは私に言い聞かせるように、ゆっくりと喋る。

「世界のために召喚された者は、この世界を動かすための一部となるのです。そしてあなたに与えられた役目は『魔王』。この世界にいる限りあなたは『魔王』であり続けます。そこから逃げる事は出来ません」

なんか面倒くさい設定を持ち出してきたぞ。しかも、召喚ときた。

「あんたの言い方だと、まるでここが異世界みたいに聞こえるな」
「その通りでございます。ここは魔王さまがいらした世界とは異なる世界でございます」

……なんか、本格的に面倒くさくなってきたな。
適当に投げ出して逃走したいが、囲まれているため無理だった。

先程まで頭の中は怒りが渦巻いていたが、今では混乱している。仮装大会の場に紛れこんだのでもなければ、異世界に召喚されまして、と聞かされて納得のできる状況なのだ。非常に不本意で、認めたくはないが。

「仮に、ここがあんたの言う異世界だとして、なんで私が召喚されたわけ？」

用もなく、気まぐれで召喚するほど召喚術は楽なのだろうか。

「先程も申しました通り、魔族を救ってほしいのです」

「嫌だね」

即答で返す。

絶句しているギゴリアの様子をうかがいつつ、私は腕を組んだ。

「なにを期待してるか全然わからんが、少なくとも私は普通の高校生だ。あんたらが期待するような力は欠片も持ち合わせちゃいないだろうね。つか、なんでそんな他力本願なわけ？ 自分らでなんとかすれば。私には関係ない」

私は囲んでいる魔族たちを見回す。魔族たちの目には様々な感情がうかがえた。

——崇敬、怒り、畏怖、憧れ、嫉妬、混乱。

仮に私が魔王だとしても、全員がそう思っている訳ではないだろう。好意的な者もいるが、そうでない者もいるのだ。召喚した者たちの中でも意見が割れている。そこから、どう考えても私は『はずれ』だったと分かる。

私は芝居がかった仕草で私を囲んでいる魔族に呼びかけた。

「あんたらはどう思う？ どう見たって、私は普通の人間だ。魔族ですらない。こんな奴はさっさと帰して、別の奴に頼んだ方がずっと良いと思わないか？ 私を説得するよりも、聞き分けの良い奴を召喚した方がずっと効率的だ。違うか？」

どの道、私から交渉の余地はほとんどないのだ。私も混乱しているが、相手も混乱している間に強引に話を推し進めないと、流されてしまう。――まあ、ここまでやると失敗した時の反動も酷いだろうが。

「そんなわけで、さっさと元の世界に帰してもらおうか」

私はにつこり、と笑みを浮かべる。友人からは「何を企んでいるの」と毎回疑われてしまう笑みだが、本人は気付いていない。ギゴリアは申し訳なさそうに答えた。

「残念ですが、それは不可能です」

「なんで」

「我々の力が足りていません」

力が足りないだけで方法はあるらしい。

「つーことは、別にあんたらじゃなくても出来るってことか。ちなみにどこに行けば帰せる人がいる。この質問に拒否権はないと思え」

ふと、言いながら思ったが、なんで私はここまで上から目線なんだ。さすがに限度というものがあるだろう。しかし、彼らなら強引な手口を使っても大丈夫だという確信がある。命令口調だし。

相手が必要以上に下手に出てるから？ それとも苛立っているの

か？

まあ、丁寧な対応をしても状況が変わると思わないが。

「王都の最高位の宮廷魔術師に頼めばいいかと」

「方角は？」

ギゴリアは指で指し示す。

「ふうん。じゃあ行くか。さよなら」

ここにいる必要はこれ以上ない。この場から逃げるのが優先。うまく逃げ切れるといいが。

「なりません」

やはりというか、進路を塞がれた。思わず舌打ちをする。

「あなたはどこからどう見ても魔王さまです。そんな状態で王都な
どに行かれては、殺されてしまいます」

「は？」

魔王は確定なのか？ 自覚は全くないぞ。

「私のどこが、どう魔王なんだって？ どこにでもいる、普通の人
間だ」

性格です、と言われたら正直に傷付くだろうか？ それほど繊細
でもないか。

「魔力です」

「まりよく？」

まりよく……魔力か？ そもそも魔力ってなんだ。

「あなたの魔力は、この世界で一番秀でています。そして、その魔力の輝きは魔王そのもの。あなたがなんと言おうと、魔王なのです」
「……………」

めんどくせえ。そもそも意味分からん。世界で一番すごい、と言われてもピンと来ない。思わず思考放棄。とりあえず、私は魔王確定。

そうだ。魔王なら自分で帰れるんじゃない？

「私が魔王なら、自分で帰れるよな。方法は？」

「残念ながら、それも不可能です」

「理由は？」

「術師本人は送れないのです」

私は少し考えた。

王都に行くとか殺されるって事は、宮廷魔術師とやらも当てにならない。脅してやらせる、という方法もあるが失敗した時に報復できないな。そもそも、どさくさで殺されるか。この案は却下か。

そもそも、術師が一人である必要があるのか？

「ちなみに、ここにいる全員でやったら出来るのか？」

「出来ません」

即答か。回りくどいよりはずっといい。

「魔族全部を集めた場合は？」

「それでも不可能です」

「ないない尽くしか」

「申し訳ございません。……ただし、一つだけ方法がございます」

ギゴリアはにこり、と微笑んだ。即座に私はこの笑みに裏がある事を察知する。

「我ら、魔族を救えば魔族の力は上がります。そうすれば、帰る事が出来ますよ？」

殺される可能性を常に持ちながらも、この世界で暮らすか。それとも魔族を救って元の世界に帰るか。

良い性格をしている。さすが魔族。

「つまり、初めから私に選択権は無かったわけか」

生き延びたければ魔族を救え。

私はギゴリアを睨みつける。

「それならそうと、さっさと言えばよかっただろうが。遠回しに言うから時間を無駄にしたじゃないか」

「失礼いたしました」

口だけだな。本心では全然思っていない。

「めんどくせえが、やるよ。だが、救うのは性に合^しわん。壊すの専門にさせてもらうからな」

「問題ございません。攻撃は最大の防御、でございます」

攻撃は最大の防御、か。ギゴリアの場合は口撃か。確かに、外堀を埋められたな。お前が魔王やった方がいいんじゃないか？

第2話（後書き）

口調から分かりにくいですが、主人公は女です。

第3話

私が魔族のために戦う事を承諾すると、ギゴリアは人垣を分けて土で造られた小さな家へと案内する。先程まで魔族の方に気が逸れて気付かなかったが、どうやら外にいたらしい。足元には砂。空は意外にも晴天だった。

空が青い事は良い事だ。これがショッキングピンク（それに限らず目に痛い色）だったりしたら、目も当てられない。魔族なんか放って本気で引き籠っていたな。空は私の癒しだから。

「しかし、ずいぶんと寂しい所に住んでいるんだな」

家に向かうまでに見てきた風景は寂しい、というよりも荒涼としていた。土地は異様に拓ひらけていて、海のように地平線が見える。ただし植物が一切、生えていない。地面が乾燥している所為だ。砂漠ほど酷くはないが、これでは土地に根付く植物を探すのに苦労するだろう。

そもそも、なんでこんな不便な場所に住んでいる？

そして魔族の幅、広過ぎないか？

この世界の魔族は一見いっけんしたただけでは全てを把握できなかった。種類があまりにも多すぎるのだ。ゲームでよくいるエルフっぽいものいれば、ドアーフっぽいものもある。さらに獣人、鳥人、魚人。果てはゾンビやフランケンシュタイン、キメラまでいる。なんでもありというより、節操なしだ。

まあ、どうでもいいけど。

「追い出されたのですよ、元いた土地から」

迫害か。いや、魔族って響きから嫌われていそうだから、討伐の方が正しいだろうな。というか、一部は確実に人から拒絶される容姿をしている。ゾンビとかゾンビとかゾンビとか。皮膚とか縫い合われている奴らも無理だろうな。不思議と臭いはしないけど。

「で、なに。具体的にはなにすれば良いんだ？ 一応、魔力とやらはあるらしいが、私のいた世界にはそんなのなかったから使い方知らねえよ」

「予想はしてりました」

あんな馬鹿そうな返しをすれば分かるか。

「あ、そ。魔王やります宣言したから、非常に面倒くさいが、魔王としてあんたらを助けてやるよ」

私は妙な所で義理堅いのだ。これは私の唯一の美点であり、とても厄介な所。だって面倒くさい。面倒くさがりなのに義理堅いか、矛盾し過ぎだったの。慣れない事するから疲れるんだよ！

「そこで問題。私は一体、どうやって魔族あんたらを助ければいーでしょうか」

「……………」

「可哀そうな子を見るような目をするな！ まあ、あえてそうした節ふしもあるのだが。」

「さっき言った通り、私のいた世界に魔力なんてなかった。実際、この魔力で何が出来るのかもサッパリ分らん。正直にこの状態で放り出されたら返り打ちされるのは必至だな。当然、そんな状態で

向かうのは時間の無駄」

私はギゴリアの様子を観察する。

先程までギゴリアは私に憐れな視線あわを向けていたが、今はそれを改めて私の話を聞いているようだ。まあ、王都に行こうとして止められるくらいだから、予想はしていただろうけど。

「あんたはそのため、これから説明するんだろうけど私は長ったらしい話は大嫌いなんだ。だから先に言っておく。要点だけ言え。時代背景が必要な所はざっくりでいい。じゃないと途中から聞かなくなる」

私の集中力は最高で二時間だ。それ以上は持たない自信がある。

普段のテストは良いけど、受験は推薦で筆記なしを狙うしかないだろう。高校受験もそうだったし。

ギゴリアはかしこまりました、と礼をする。

「その前にお茶はいかがですか？」

「好きにすれば」

ギゴリアは立っていた私に椅子を勧めた。私はギゴリアの様子を窺いながら座る。私の様子に気付いてか、ギゴリアは微笑みを浮かべた。

「そんなに警戒されなくても大丈夫ですよ、魔王さま」

「……その魔王さまっての、やめて欲しいんだけど」

「では、名前を覚えておいでですか？」

「……………」

言われて、覚えていない事に気付く。意識しなくても思い出せる

類のものにも関わらず、覚えていない。むしろ、正しくは覚えていなかった事すら自覚していなかった。

「対価なのですよ。召喚された者は、自らの存在を証明するすべを一切失う。その最たる物は名前。名前が消失した場合はそれ以上の対価は取られませんから、ある意味運が良かったでしょう」

名前以外の何が消失するかは考えたくもないな。

「それで召喚される方は最悪だな」

「まあ、それがこの世界の法則ですから」

めんどくせえ。

「魔王さまはどのようなお茶が好みですか？」

ギゴリアはポットを片手に聞いてくる。

「渋過ぎなくて、甘過ぎないもの。苦いのも無理だから」

どんな種類があるのか分からないので、無難に苦手な物だけ答えた。そもそもお茶の好みを聞かれても、答えられるほどこだわりはない。

しばらくして出されたお茶は普通の緑茶に見えた。少なくとも色は緑茶だ。

「さて、それではご希望通り、簡単に説明させていただきます」

ギゴリアはお茶を口に含んで、にこりと笑う。

ギゴリアが老人じゃなかったら嫌いだっただろうな、と私は唐突だが本能的に思った。

第4話（前書き）

魔族の説明。でも一部。ややこし過ぎる。

第4話

「まず、魔族というのは魔に堕ちた者の総称です。なので人、動物、果ては道具までもが魔族と呼ばれます」

「どうやら魔族の定義から教えてくれるらしい。非常にありがたい。私としても、魔族の幅が広すぎて困っていた所だ。」

「そして魔力だけでも生活できます。簡単に言いますと、食事の必要がないのです」

「すごい便利だな」

「ですが、魔力の強さが大きく関わってきます。弱い者は吸収が上手くいかず、食事などから摂取する必要がありますのです」

「つまり食べ物には魔力が入ってるのか。魔力の入った食べ物……なんか楽しみだ。」

「魔王さま程の魔力の持ち主になりますと、食事の必要はありませんね。もちろん、食べる事も可能ですけど」

「だがそれだけじゃあ、嫌われる理由にはならんな。なにが原因なんだ」

「姿、そして魔力の質です。簡単に申し上げますと、魔力には二種類あります。一つは精霊たちに好かれる魔力。もう一つは嫌われる魔力です」

「それは種類というより、好みだろ。」

「この世界に存在するモノたちは精霊たちに好かれる魔力をしますが、魔族は嫌われる魔力をしています。その上、魔力が禍々し

いとか。なので人々からも嫌われるようになった、と言われていま
す」

「禍々しいとなにか問題があるのか？」

「その者たちの周りが歪んで見えるそうです。わたしは生まれつき
魔族なので知りませんでした、魔に堕ちた人もいますからね。その
方から聞いた話です」

……魔に堕ちる、ね。

「生まれつき魔族と、魔に堕ちた人と、普通の人の違いって？」

「それは特にございません。普通の人と比べて、魔族は魔力の質が
違うだけなので」

いや、あのゾンビとかは完全に違うだろ。

「あの明らかに血の通ってなさそうな人たちは？」

ゾンビという言葉があるか分からないので、遠回しに聞く。ギゴ
リアは少し考えたが、すぐに分かったらしい。

「あれは死者の執念によって、魔に堕ちたと言われています。道具
は持ち主の残留思念から魔に堕ちると言われます。道具は広義では
魔族ですが、魔具として封印される事が多いですね」

「そもそも生き物なのか、あれは」

「生きていようが生きていなかろうが、魔に堕ちている者は魔族で
す。そんな些細な事を気にしてたら、限きりがありませんよ」

ギゴリアは首を傾げて、逆に不思議そうに私を見る。

些細な問題なのか？　そもそも、その感覚が問題なのでは……い
や、考えまい。

「つまり、あんたたちにしてみれば、迫害されるのは言いがかりだ
って言いたいのか？」

「はい」

なんか本当に厄介なのに捕まっちまったんだな。本当にめんどく
せえ。

「じゃあ、根本的な質問。なぜ魔族が存在する？」

「存在するのは先程申し上げた通りですが？」

「いや、そっちじゃなくて、どうして魔に堕ちる人がいるのかって
事。生まれつき魔族なのはまあ、置いておくとして、なんで普通の
人とかが魔に堕ちるわけ？」

「人間風に言うなら、魔に魅入られたんでしょう」

「そもそも魔ってなに？ 私はそんなに魅入られた記憶がないけ
ど」

「私たちに言わせてもらえば魅入られた、というよりも素質があっ
た、と言うべきでしょうね。使い方も違いますし」

精霊に嫌われる魔力なのに、素質なのか？

いや、さつき残留思念とか言ってただろ。素質ってそういうもの
なのか？ 違うだろうな。そもそも残留思念がどういうものか想像
できん。残留思念で魔族になれるって事は、残留思念自体が魔力を
帯びているって事なのか？ それって素質っていうのか？ よく分
からん。もうぐちゃぐちゃだ。

……まあ、魔族の常識からして問題があるようだから仕方ないか。
まともな知識を提供してくれそうな人を探すところから必要があるよ
うだな。道程はかなり長い。

そこまで考えて、うんざりした。

「普通の魔術は精霊にお願いする形を取っているらしいですね。なので失敗する事もあるとか」

ギゴリアの言葉に思考を一時中断する。しかし、さっきから聞いてると精霊に好かれてない人とか不便そうだな。好き嫌いがあるってことは、その度合いも違うだろうし。

「ですが、私たちは自分たちの思った時に、好きなように使えます。どちらにしても、魔力を消費する事は変わりませんが」

「なら、私は好きな時に魔術を使えるのか？」

「そうですね。使えます。わたしたちの場合は魔法、と呼ばれますが」

なんか、かっこいいな、それ。

「呪文とか必要なのか？」

「厳密には必要ありません。ですが、イメージを補助する形で必要となりますね」

イメージ……例えば、火だったらろうそく蝋燭とかか？

私のすぐ傍に蒼い火の玉が現れた。私は驚くが、表面には出さない。

「そんな具合です」

「ちなみに、魔法で魔族である事を誤魔化す事は出来るのか？」

私は火を消す。イメージではなく、意識するだけですぐに消えてくれた。なんか楽しいな。

「出来ますよ」

これって問題解決じゃないか？ 魔族である事を隠して暮らす。
それで大丈夫じゃないか。

「ただし、常に魔力を消費します。先程言った通り、弱い者は吸収
が上手くいきません。そうになると、すぐに魔法は解けるでしょうね」

却下かよ。

「私だったら、どれくらい持つ」

「食事を摂取しながらなら、十年以上は可能かと」

「……………」

魔王すごいな。これが噂の主人公補正ってやつなのか？ ……ん、

魔王って主人公か？ むしろ悪役なイメージしか出てこん。まあ、
便利ならなんでも良いか。

でも役割は滅茶苦茶めんどくせえ。結局、得はしていないんだな
？

第4話（後書き）

主人公はまともな人を探す所から始めるようです。先は長い。

第5話

このままギゴリアの話聞くのも手だが、正直、魔族の知識は魔族関連の基礎知識以外信用できなかった。国に関しても聞いたが、ギゴリアはあまり詳しくないらしく、とにかく人から離れる事を優先していたらしい。最低限の情報収集もされていないようだ。

結論。とりあえず人から話を聞いた方がまだ、まし。

結論を出した所で私は足早に魔族たちの住処^{すみか}を後にする。寂しげな視線をすれ違う魔族たちから受けるが、それらも全て無視した。これ以上ここにいると、色々な意味で汚染されそうだ。

結局、出されたお茶は飲まなかった。

ギゴリアに、人のいる一番近い村と聞いた場所にやってきた。近いと言っても距離はかなりあった。村に着いた頃には日が暮れかけている。それくらい離れなければ魔族は平穩に暮らせないのだな、と他人事のように思う。

しかし遠かった。すごく疲れた。どこかで休みたい。

村を適当に歩くが、どことなく歩く人々の視線が痛い。私はそれを気にせず人々を観察する。

服装はファンタジーでよくある中世ヨーロッパ風だ。魔族たちと服装は大して変わらない。もっとも、服装に関しては疎いため、それ以上はなんとも言えない。私は変わらず制服のままでいたため、非常に浮いている。服だけでもギゴリアに借りるべきだったと今更ながら思う。

でもサイズが合わないか。ギゴリア小さかったし。

続いて家は、木で造られているものが多いようだ。魔族のいた土地は草一つ生えていなかったが、人里に近付くにつれて植物は増えていたため、材料には困らないのだろう。しかし地震にとっても弱そうだ。日本人としては非常に不安な要素である。もともと、地震が起こる事がないから、こんな造りなんだろうが。

しかし、本当に人々の視線が痛い。こそこそと内緒話をする人や、あからさまに嫌悪感を隠さない者もいる。なぜだろう、と首をかしげるが思い当たる節は服装ぐらいしかない。

そんなことを考えていると、どこからか石が飛んできた。身体には当たらなかったが、足元に転がり落ちる。飛んできた方向をみると、子どもがいた。それぞれの手に石を持ち、次々と投げてくる。

「魔族は出てけ！」

「あっちいけ！」

「魔が移るだろ！」

そこでようやく自分が注目される理由に思い当たった。

——そういえば、魔王なんだっけ。

魔王ってことは魔族の頂点だから、私も魔族なのか。ギゴリアに聞いた話を私はほとんど流していたらしい。もしくは実感が沸かなかったから意識できなかったか。

致命的なミスだな。

しかしギゴリアから魔族である事を誤魔化す事は出来るという事も聞いていた。だが、具体的な方法は分からない。その場で腕を組んで考えるが、石の雨はやまない。命中率は低いが、当たると痛そうだ。それ以上に、避けるのも面倒だ。かといって自分よりも小さ

い子どもに手を上げるのも、年長者としてどうだろうか。

傘があればなあ。

すると、石が私に届く前に何かに阻まれるように弾はじかれた。よく見ると、傘のような円形をした物が石を防いでいるようだ。子どもたちは気付いていないようで、そのまま投げ続けている。

そういえば、イメージが重要だと言ってたな。

あればいいな、で防げるなんて魔法は随分と便利だな。

ずっと石を投げていて飽きないのかな、なんて考えつつ子どもたちを観察していると、子どもたちがぼんやりと、白い光りに包まれているのが見えた。気の所為かと思いい、周囲を観察するが、子どもに限らず大人も光りに包まれているように見える。

これが魔力なのか？

よく見ると、人によって明るさに違いがあった。この輝きに比例して、精霊の好みが分かれるのだろうか。だとしたら、私の場合は逆に黒い光りに包まれていると考えた方がよさそうだ。

光りなら、それを遮ればいい。

私は身体全体を覆うようなコートを思い浮かべる。すると、子どもたちは不思議そうな顔をした。

「あれ？」

「なくなった……」

「きっと俺たちの力で魔族の力が去ったんだ！」

どこか自慢気に子どもたちは喋り出す。

「魔族って案外、簡単にやつつけられるんだな！」

「どうだ、魔族！ 俺たちの力を思い知ったか」

鬱陶しい。

私は子どもたちを無視して村の奥へと進む。なぜか人々は道を開けてくれた。その目にどこか怯えが混ざっているようなのは、なぜだろうか。

なにかが走ってくる音が聞こえたので、私は立ち止まり、観察する。

しばらくすると正面から鎧を纏い、馬に乗った人たちが十人ほどやってきた。いわゆる騎士のような格好だ。かっこいいな、と思いつつ私は道を開けた。

騎士は私が先程までいた場所で馬を止め、周囲を見回す。怪訝そうに仲間に話しかけた。

「おかしい。この辺りで強い魔族の反応があったはずなのに」

「ああ。もう感じられない」

風に乗ってそんな言葉が聞こえてくる。距離が開いているのに、支障なく聞こえた。声が大きすぎるんだろうな。もう少し配慮すべきだろ。

私は近くの物陰ものかげに隠れ、騎士の視界に入らないように気を配った。だが、騎士がどのような反応をするのかも知りたかったので、その場に留まる。

そもそもこいつら、なんで魔族わたしがいるってわかった？ 走ってきた事といい、結構な距離があったはず。誰かが私の存在を騎士に知らせたのだろうか。

「唐突に消えた感じだったよな」

「ずいぶん強い魔力だった。要塞にいたのにも関わらず感知できる程の力の持ち主だ。さすがにここに来るまでにどこかにいったんじゃないか？」

要塞ってどこだ？ 少なくとも私の魔力が届く範囲にあるんだろうが、届く範囲なんて分からない。したがって、見当もつかない。

「仕方ない。聞き込みでもするか。魔族を見た人もいるかも知れないし」

厄介な事になったな。

だが、騎士や村の人の話は私にとっては貴重だ。ギゴリアの話より、人から見た魔族が分かりやすいだろう。

いっそのこと、空気になれば楽なのに。

そんな事を思っていたら、身体が軽くなった。身体を見下ろすと、半分透けている。

「……………は？」

なぜかは予想がつくが、予想外だった。

第6話

身体が透けている。

事情を知らずにこんな状況になったら、かなり焦る。知っていても焦る。なぜなら意識していなかったから。誰だっていきなり透明人間になれば驚くだろう。

空気になるって、どんな感じだ？ 予想ができない。そもそも自我を保っていられるのか？ 無機物だろう？ もしかして、このまま死んじゃったり……。

そこまで考え、私は急いで空気になる事を中断させる。急に身体の重みが増す。手を目の前にかざして透けていない事を安堵した。

「焦った……」

柄にもなくかなり焦った事を自覚する。一応、私は冷静なのが売りなのだ。他人から見た私の評価がどうだろうと、冷静であろうとする事自体は問題ないはず。

これからは不用意に想像しないように注意する必要がある事を自覚した。先程の傘はよかったが、自覚なしに魔法を使ってしまうのは危険だ。

かといって、このままこの場にいても危険だろう。

私は騎士と村人を観察する。周囲に目を向けるが、犬などの動物は少ないようだ。そんな事を考えていると、鳩が空から舞い降りて暢気に歩き出す。

……鳩、かあ。個人的には鳩の方が好きだ。

視線が一気に下降した。視野が狭くなり、視界の見え方が変わる。不審に思い、手を見ようとするが、そこにあるのは黒い翼。羽が身体から生えていた。

『……………駄目駄目だな、おい』

口から嘆息たんそくに近い鳴き声が出る。間違いなく、鴉の鳴き声だった。先程注意しようと思ったばかりなのにも関わらず、この体ていたらく。私は自分の注意力のなさに呆れた。まあ、先程の空気よりはまだ良い。

私は騎士と村人の元へ近付く。歩くよりも跳んで近寄った方が早いようだ。ぴよんぴよん跳ねながら近付く。そういえば、鴉は肉食だっけ？ 近くにいた鳩が、なんとなくおいしそうに見えた。だが、そこは理性で抑え込む。

「あれ？　なんだ、この黒いの」

先程、石を投げてきた子どもが鴉わたしに興味を示す。

「こんな鳥、初めて見るね？」

「うん。おいしいのかな」

身の危険を感じた。反射的に私は空へと飛び立つ。下の方から子どもたちの声が聞こえてくる。

「あ、逃げた」

「捕まえようぜ。今日の晩飯に」

「さんせー」

大人しく鳩にしておけばよかった。後悔先立たず、とはまさにこ

の事か。

とりあえず食べられるのだけは回避したい。だが情報も欲しい。妥協案として私は近くの家の屋根に留まる事にした。子どもたちはしばらく石を投げて威嚇するが、私はそれらを全て無視する。しばらくすると、子どもたちは恨めしげに私を見上げた。結局あきらめたのだろう。どこかへと去っていく。

距離は大分離れているにも関わらず、声は何の支障もなく聞こえる。鴉の耳はこんなによかったのだろうか。賢く、記憶力がよい事は有名だが。

「さっきまでそこに黒い子がいたのよ」

私の学校の制服は黒いからな。お陰で生徒からは地味だ、とかなり不評らしい。私は髪も目も黒いため、全身黒尽くめに見えても仕方のない事だ。

「まだ子どもに見えたわ。でもどう見ても魔族だった。あの子の周り一帯が黒く歪んで見えて、本当にひどかったわ」

そんなに酷かったのか。今度から気を付けよう。目を付けられても面倒だ。

「でもね。何かを考えるようにボーっとしてるかと思えば、ふっと消えたのよ、魔族の気配が」

やっぱりそう見えるのか。人前でやったのは間違いだったな。

「それからどっかに行っちゃったわ。怖くてどこに行くかは見てないけど」

「そうですか」

騎士は淡々と頷いた。騎士はしばらく同じように他の人に聞き込みをしていたが、内容は変わらない。私を最後まで見ていた人によると、私は突然消えた事になっているらしい。一瞬、空気になりか

けた所為だろうか。

騎士を三人その場に留めて、他の騎士は帰る事にしたらしい。残る三人は情報収集と警備を兼ねるようだ。まあ、居残りになるのは仕事だから私の所為ではあるまい。

私は要塞へ戻る事にした騎士の後ろをついて行く事にする。その頃には日が暮れ、周囲は暗かった。

……見えにくい。

飛びながらそんな事を考えていたら、身体が急降下を始めた。その事に気づき、羽ばたいて体勢を立て直そうとするが、どうも安定に欠く。

なんだ？ 頭がくらくらする。どっちが前だ？

騎士たちの持つ松明の明かりのお陰で見失う事はないが、なんとなく目が回る。気持ち悪い。

慣れない姿になっているからか？ そういえば一部を除いて鳥は夜、目が悪かったんじゃないか？

急に視界が暗転する。辛うじて松明の明かりがぼんやり見える程度になってしまった。まずい、と動揺が走る。飛行が上手くいなくなり、どんどん高度が下がっていった。

まずい、まずい、まずい！

頭は痛いし、目は見えないし、もう最悪だった。どしゃ、と音を立てて何かにぶつかる。何かは分からない。状況

を把握する事が大切だと分かるが、前が見えない。何も見えない。その事に更に焦りが増す。

——そうだ。人の姿に戻れば良いんだ。

その事を思い出し、朦朧もうちろうとした意識で元に戻る。だが、頭痛は治まらない。むしろ強まっていた。

なんでだ？ 魔力切れ？

頭を抱えて、しばらくその場に蹲うずくまるる。土で服が汚れようが、構っていられなかった。それほど、頭痛は酷かったのだ。訳が分からなかった。なにが原因なのかも分からない。

さっさと治れよ、くそっ！

私はそのまま気を失った。

第6話（後書き）

もしかして、ピンチ？

第7話

目を開けると朝だった。

強張^{こわば}っていた身体を解^{ほぐ}しながら、ゆっくりと立ち上がる。頭にはまだ鈍い痛みが残っているが、気になるほどではない。

なにが原因だったのだろう、と考える。

パソコン画面やテレビを見過ぎた時に感じるような、頭痛と同じような種類に思えた。あれは目の疲労から来るものだっただろうか。それに脳が反応して頭痛を起こす。だとしたら心当たりは一つ。

慣れない魔法の使いすぎ。

昨日、行^{おこな}った魔法を思い出す。

傘の形をした防御魔法、魔族の魔力を誤魔化すためのコート、鴉に変身。中断を含めるなら、空気になるのもそうだろう。そういえば蒼い火の玉も出したっけ。

合計五つ。

多いのか少ないか分からん、というのが正直なところ。そもそも疲労感は全く感じない。身体が魔法を使うのに慣れていないせいで負荷でもかかったんだろう、多分。

どうせなら体質も改善してくればいいのに。

慣れない内に魔法の乱発は危険だ。そういえば、魔族であることを誤魔化すコートは健在だろうか。

私が目を凝らすと、身体を覆うコートがうつすらと見えた。解除はされていないようだ。その事に安堵する。

騎士たちは村の外にある要塞からやって来た。その事から考えると、この魔法が解けていたら騎士たちに見つかっていた可能性があ

る。見つかった際、どう扱われるか全く見当も付かない。解けていなくてよかった。例え、その所為で頭痛を起こしていても仕方ないだろう。

私は服に着いた砂や葉を払い落す。傍には大きな木があった。昨日ぶつかったのは、おそらくこの木だろう。幹に何か引つ掻いたような小さな傷がある。ぶつかった際に付けてしまったのだろう。悪かったな、と元の姿を想像して触ったら、あっという間に修復された。ふむ、本当に便利な力だ。

昨日は見失ってしまったが、要塞に行く必要がある。私の魔力が感知される距離を知る事も必要だが、なにより、昨日の村よりは情報を集めやすいだろう。幸い、人々が踏み馴らして出来たと思われる道があった。これならば迷う心配はない。

私は要塞へと歩いて向かう事にした。

徒歩では要塞までの道程は長かっただろうと思われる。途中で気の良い幌馬車ほろばしやに乗った行商人に会い、同乗させてもらったため昼前には要塞に着く事が出来た。運が良い。

要塞、というから重々しい物を想像していたが、殺伐とはしていなかった。

予想はしていたが、外壁は高く分厚い。おまけに威圧感たっぷりである。初めて見る外壁に驚きを隠せなかった。顔には出なかったけど。

外壁の中は普通の街だった。

大通りには多くの露店が並んでいる。野菜や果物を取り扱っていたり、服や装飾品を取り扱っている店もあった。本当に多種多様な祭りみたいだ、と内心で思う。

「それじゃあ、ここだね」

「助かった。ありがとう」

幌馬車に乗せてくれた気の良い行商人にお礼を言って、別れる。

ん？ 猫被ってるって？ いや、これは最低限の礼儀だ。別に友好的であった訳ではない。

そんな事は置いておくとして、馬車から少々拝借はいしゃくさせていただいたフード付きのマントを羽織はおる。一番安そうなのを選んだが、着心地は悪くなかった。これで服装は誤魔化せる。

食事いらずなのは正直、大変助かった。私の所持金はないのだから。こちらの世界に来る前に持っていたはずの鞆は消失している。原理は不明だ。もしかしたら対価として奪われたのかもしれない。そう考えて、若干怒りを覚えた。

どっちにしても、お金が同じとは限らなかったからいいんだけど。

私は少し長い前髪を掻き上げる。鬱陶しいなあ。家に帰ったら切ろうと思っていたのに、台無しだ。

鉢はさみで前髪を切るのを想像したら、本当に切れた。視界がさっぱりする。

こうやって不用意に使うから駄目なんだろうな。誰も見てないよな。

私は首を回して周囲を窺うかがうが、問題はないようだった。本当に魔法使うのを自重しないと、昨日の様に激しい頭痛に襲われるかも知れない。

自分の自制心のなさに呆れた。

ああ、めんどくせえ。

「なあ、その兄ちゃん」

気の良さそうな男だった。ホットドッグを売っているようだ。少なくとも、ホットドッグに見えた。香ばしい匂いが漂ってくる。押し売りだろうか。しかし美味そうだ。私は意外に食い意地が張っている。食べたいが金がない。

「なんだ」

「昼間っからボウっとしてどうしたよ。腹減ってんのか？」

どうやら親切心から声をかけてきたらしい。そんなに私はボーっとしてるのか？ 昨日の村でもそんな事を言われたような気がする。

「別に減ってはいない。お金も持っていないし」

「金持っていないのかい？ おいおい、兄ちゃん大丈夫かよ」

「大丈夫だ。それに私は兄ちゃん、ではない。姉ちゃんだ」

一応、訂正はした。男は私を上から下まで眺め、驚いたように目を丸める。

「そうかい、そうかい。そいつは悪かったな。――じゃあ、お詫びにこいつをやるよ」

作り置きされていたホットドッグもどきを渡される。美味そうだ。私はありがたく貰う事にした。

「ありがとう」

かぶりつくと普通のホットドッグと変わりなかった。当然、コンビニで売られているような物よりは遥かに美味しい。

「そういえばさ、昨日、騎士がどこかに向かったよな。あれは、な

ぜだ？」

私は情報収集も兼ねて男に尋ねる。

「ああ。魔族が出たんだってよ。おっかねーよな」

「どうして魔族はおっかないんだ？」

「そりゃあ、魔族がいると体調が崩れるからだろ。常識じゃないか」

私は初めて聞く言葉に目を丸めた。

「身体に影響が出るのか」

「ああ。なんというか、空気が淀むんだ」

初耳だ。だが、昨日の村人たちは平気だった。この差は一体なんだ。なぜ、差が出る。

「といっても、個体差があるがな。全く影響もないものもあるし、強く影響するものもある。こっちにしてみれば、どっちも危ないがな」

「危ない？　なぜだ。少なくとも影響の出ないのは問題ないんじゃないか？」

すると、男は目を丸めた。

「だめだめ。嬢ちゃん、そんな事も知らねえのかい。魔族はな、移るんだよ」

村の子どもも言っていたな。てっきり出任せかと思っていた。意外にも真実らしい。少なくとも、そう認識されていると考えた方が正しいようだ。

「なんで、移るんだ？」

「そりゃあ、風邪みたいなもんだからな。風邪と違って治らないがな」

ふむ。やはり魔族の知らない知識か。多分、その所為でズレがあるのだろう。ここを知る所から始めないと、取り返しのつかない事になるだろうな。

ああ、めんどくせえ。本当に全部ぶっ壊そうかな。

第7話（後書き）

なんだかんだで破壊以外の方法を探しているようです。

第8話（前書き）

少し内容訂正。前の話と内容が一部重複していました。すみません。

訂正はしましたが、まだ重複しているかもしれません。ご了承ください。

第8話

ホットドッグを食べ終え、私は本題を切り出す。

「昨日、魔族の気配を感じなかったか？」

男は頷いた。

「ああ、今までにないほど強い魔族だったと思うぞ。不思議と気分は悪くならなかったから、悪い奴じゃあないんだろうけど」

「そうなのか？　なら、なぜ騎士が動いたんだ」

「ああ、それは村を襲いに来たんじゃないかと思ったからだよ。魔族の襲来かってね。大軍で行こうか迷っていたらしいが、全員で行ってもあの魔力の量じゃあ、やられるのが関の山だ。だから先鋭部隊十人で向かったらしい。結局、いなかったらしいがな」

「そうか。これから何を対策するかとか言っていたか？」

男は考えるように首を捻^{ひね}る。

「いや、とりあえず王都に使者を送ったのは聞いた。ここだけの話、昨日の魔族は魔王なんじゃないかって噂だ」

そんなに魔王の魔力は普通の魔族とは桁違いなのか。

「へえ、そうなのか。そうなると騎士団が大勢来るか？」

この回答によって、私の今後の動きは変わる。

しかし、この答えは予想外だった。

「いいや。静観するとよ」

静観。つまり様子を見るという事か。だが、魔王みたいな危険な奴を放っておいていいのか？　まあ、個人的には嬉しいが、普通は住人から不満が出るはずだ。

「刺激して攻撃されたくないってのが、本音。俺たちもあんな奴に勝てるとは思えない」

そこまで圧倒的なのか、魔王。さすがだ。

「そっか、サンキュ」

「？」

どうやら、こちらではない言葉らしい。だがニュアンスは伝わったのか、怪訝そうにしながらも頷いていた。

私は適当に街の中を歩く。時折、精霊魔術を使って何かを作り出している人もいた。私はなんとなくしか精霊の姿が見えないためか、精霊の姿はぼんやりと光りの塊が浮かんでいるように見えるだけだ。精霊は魔法の種類によって色が変わるらしく、いろんな色が飛び交っている。優しい色合いで浮かぶ光りの塊は、とても幻想的で綺麗だった。

私には使えないんだよな。

光りの塊に手を伸ばすが、傍で漂^{ただよ}うだけで何も感じない。その事が少し残念だった。

そんな事を考えつつ歩いていると、いつの間にやら路地に入ってしまったらしい。人通りが少なかった。しかし人混みに飽きていたので丁度良い、と適当にうろつく。私は街にある細い道や、誰もいないような道を探検するのが好きだった。これもその一環である。

「……………?」

しばらく歩くと違和感を覚えた。どこか懐かしいような気配を近くに感じる。そう思ったら、大通りの方から悲鳴が聞こえてきた。嫌な予感がする。

私は考える間もなく、走った。

大きな広場だった。噴水があり、普段は人を和ませるような場所なのだろう。しかし今、人々は恐怖に包まれている。

「魔堕ちだ……」

「なんで、こんな所で」

「もしかして、魔族が近くにいいのかしら」

私は人混みを掻き分け、徐々に広場の中心地に近寄っていく。

「なんでこんな街中で魔堕ちなんか」

「他所者だよ。他国の奴だ」

「なんで他国の奴がこんな所にいるんだ」

人々は恐怖に包まれながら、その根源に対しての暴言を吐き続ける。恐怖のせいか大きな声にはなっていないが、囁き声を聞くだけでうんざりした。

「魔堕ちなんて他所^{よそ}でやってほしかったわ」

「騎士団は何をしている！ さっさとあいつを殺せ！ 子どもに移つたらどうしてくれる」

「近寄っちゃだめよ。あれは悪い奴なんだから」

「えー、見てみたいよ」

私はようやく中心地に出る事が出来た。何かを囲むように人垣が出来ている。まるで観客のようだった。野次馬だから観客に変わりはないが。

つまり、野次馬を出来る程度には魔堕ちは安全なんだ。

私は一つ、知識を増やした。しかし疑問も増える。

――移るんじゃないかったのか？

人混みを抜けて、魔法で空から来ればよかったんだ、と今更思う。余計な体力と精神力を消耗してしまった。それにしても、人の声みみざわが耳障りだ。それを無視して、私は問題のモノに目を向ける。

それは黒く歪んでいた。

その中には人がいる。

そう、人だ。

この人たちにとって、同じ人間じゃないのか？
なのに、殺せと言うのか？

私にはこの世界の常識は、まだない。魔族に堕ちた人は、人として見られないかもしれない。けれど、私には同じ人間に見える。ギゴリアも言っていたじゃないか。魔族と人間の違いは、魔力が違うだけだ。

「なあ、なぜ殺せと言うんだ」

私は傍にいた野次馬に尋ねる。野次馬はどこか面白そうに答えた。

「そりゃあ、移るからだろ。魔堕ちした人は、人だった頃を覚えて
いるから土地に留まりたがるんだ。でも傍にいるこっちの身にもな
ってみる。いつ移るか分からないんだぜ？ そんな厄介な物は今の
内にどうにかするのが普通だ」

納得できなかった。

だが、その興奮した様子に私の心は急速に冷えていく。冷静にこ
の状況を見極めようとする。

魔堕ちしたら、その時点で人は人ではなくなる。彼らはそう思っ
ているのだ。

（だとしたら）

私は、なんだ？

「騎士団だ！ 騎士団がやって来たぞ！」

その声に思考を戻す。

（騎士団は、魔堕ちした人をどう扱う）

知リたかった。ただの好奇心だとも理解していた。私は騎士団を
見守る。

鎧に身を包んだ騎士が腰の剣に手をかけ――

それを大きく振り上げた。

第8話（後書き）

ちなみに私はこういう場合、一目散に逃げるタイプです。野次馬
なんてもつてのほか。とりあえず、厄介事は回避回避。

第9話（前書き）

魔族の口調を統一しました。何度もすみません。

第9話

振り下ろされる剣を見た時、私は反射的にその騎士を魔法で吹き飛ばしていた。

騎士たちは何が起こったのか理解出来なかったらしく、呆然としている。だが、すぐに周囲を警戒した。吹き飛ばされて地面に転がっていた騎士もすばやく立ち上がる。

「近くに魔族がいるぞ！ 気を付けろ！」
「精霊魔法の準備をしろ！」

鎧の下にくぐもった声を聞き、周囲から悲鳴が上がった。私はあまりの煩さ（うるさ）に手で耳を塞いだ。塞いだ耳からはキーンと甲高い音が響いている。

うるさいなあ。確か音って、空気が振動して伝わるんだよね。空気が振動しなくなれば、静かになるのかな？

突如、広場が静寂に包まれた。

私は耳から手を離し、逃げ惑う人々と声が出なくなり恐慌状態に陥っている人々を観察する。魔法が発動したらしい。どこまで空気が振動を止めているのかは分からないが、人が動くのにも支障はないようだ。別に真空状態という訳でもないらしい。まあ、真空状態なら人は死んでしまうだろうが。

騎士が近くにいた魔族——先程まで魔墮ちしていた人に再び剣を振り落とす。魔族になったばかりのためか、その魔族は呆然としていて、何も見ていないようだった。

私は咄嗟に騎士の剣を魔法で吹き飛ばす。急に軽くなった手元に

困惑している騎士を、近くの騎士に投げ飛ばした。投げ飛ばす時に頭痛がしたため少々手元か狂ったが、気にしない。

あいつは、いつまでボーっとしているつもりだ。

私は大きく溜息をついた。

（目立つ行動は避けたかったんだけど）

私は魔族の前まで歩く。騎士団たちがそれを止めようと動くが、噴水の水が暴れ、騎士団を人垣へと流し込む。音が聞こえなかったので、ずいぶんと唐突に現れたように思えた。私は魔族を見下ろす。

「動けるなら、なんで最初から動かなかったんだ。余計な手間だ」
女の魔族だった。短い銀色の髪をしている。彼女は水のように澄んだ青い目を細め、にっこりと微笑んだ。

「笑って誤魔化すな。口で言え」

そこまで言って、自分の所為で喋れないんだと気付く。私は魔法を解除した。同時に、頭痛が少し和らいだ。周囲に音が戻る。戻ってきた音は、ただの騒音にしか聞こえない。だが今更、戻す気にもなれなかった。

「助かったわ。ありがとう」

「別に気が向いたただけだ。それに誤魔化すな、と言っている。……まあ、ここから逃げるのが先か。行くぞ」

改めて周囲を眺めると、なかなか悲惨な事になっていた。人が人を押しあい、我先にと逃げ出そうとしている。将棋倒しにでもなったら大惨事だ。

仕方ない、と私は混乱している人々を全て宙に持ち上げた。突如、刺すような頭痛に襲われ、顔を顰める。だが、そうしてもいられない

い。

人々の顔が更に恐怖に包まれていた。一部は呆然としている。

確かに、いきなり宙に浮けば誰でも怖いな。

だが、厄介事を広げてしまった身としては何とか收拾を着けたかった。私は人々を適当に区分けして人口密度を分散させる。さらに人との間に出来る限り間隔を取らせた。思っていたよりも多くの人がいたが、ぶつからない程度に間隔を取れた事に安堵する。ゆっくりと地面に着地させた。

やばい、頭が何かに打ちつけられてる。

耳鳴りも酷く、吐き気もしたが私はそれに耐えた。ここで倒れる訳にはいけないのだ。

その頃には落ち着いてきたのだろう、人々は逆にどこか興奮したように周囲で話し出す。

「い、いま、空を飛んだよな？」

確かに、そうなるな。

「ああ、飛んだよな」

今度の頭痛はなかなか引いてくれなかった。頭痛の酷い頭で周囲を観察する。どうやら恐怖は去ったらしい。このまま私の隣にいる魔族の事を忘れてくれればいいのだが、物事はそんなに上手くはいかないようだ。

「そこの魔族、何をした！」

騎士が私たちの周りを取り囲んでいた。じりじりと包囲網は狭ま

ってくる。

「わたしは何もしていないわよ」
隣にいる魔族は飄々ひょうひょうと答えた。

「……………」

しかしこの状況、滅茶苦茶めんどくせえ。頭痛も酷いし、最悪だ。表情には出さないように堪えているが、顔を顰めずにはいられない。冷や汗も止まらなかった。

私もこのまま捕まるのだろうか。それはご免だが、かといって今更、魔族を見捨てるのは無理だった。なんとか状況を打開しなければならぬ。

「あー……めんどくせえ」
思わず口に出して呟く。

突如、大量の水が騎士たちを地面に押し付ける。騎士たちはもぐが、動く事は出来ないようだ。私は隣を見た。
魔族はにっこり、と笑みを浮かべている。

「お役に立てたかしら？」
「……………」

私は頭痛と耳鳴りを堪えながら、無言で人垣を通り抜けた。若干ふらつくが、気にしない。その後ろを当然のように魔族がついてくる。

人混みを通り過ぎ、人気のない路地へと入った。しばらく歩いて私は背後を振り返る。そしてそこには当然のように先程の魔族がいた。

「なんでついて来るんだ」

立っているのが辛くなり、壁にもたれかかる。

「だって、あなたが助けてくれたんでしょ？」

近くで見る彼女は肌も白く、顔立ちも整っている。いわゆる美人と見られる人だった。

「わたし、見ての通り、行く場所がないのよ。ついて行ってもいいじゃない」

「なんで」

正直、彼女のような目立つ容姿の魔族と歩くのは避けたかった。

「恩返しと言ったら？」

「いらん」

私は壁に手を付けて歩き出す。

「ねえ」

魔族は変わらずついて来る。厄介事ご免だった。

「どうしてあなたは魔力を垂れ流しているの？ それじゃあ、暴発しちゃうわよ」

私は足を止める。後ろを振り返った。

「やっぱりね？ あなた、さっきの沈黙魔法は無自覚だったでしょ。いくら魔力が多くても、あんな規模の大きな魔法をあんなに持続させるなんて、自殺行為よ。おまけにその後の複数に対する飛行魔法にしたって、出鱈目すぎるわ。あなた、死にたいの？」

私は無言を貫く。

どうやら魔力が多ければ、好きに魔法を使える訳ではないらしい。
むしろ、大規模魔法の連続使用は危険のようだ。

「……………」

この魔族、妙に魔法について詳しいな。さっきまで人間だったから、人間の事情にも詳しいはず。

どうやら労力に見合う、よいモノを拾ったらしい。

第9話（後書き）

頭痛の原因がようやくはつきりしてきた主人公。もう少し魔法の使用は控えた方がよいよ。

第10話

私たちは要塞を離れ、街道を歩いている。あのまま要塞にいるのは危険だった。

魔族はクリアルスと名乗った。ここではない大陸の出身らしい。そもそも、別の大陸があった事を初めて知った。

「ずっと思っていたんだけど、顔色がとっても悪いわよ。大丈夫？」
「さあな。とりあえず、歩く事は出来る。体調が悪かろうと、今は離れるのが先決だ」

頭痛は強力な魔法の連続使用が原因なのだ。しばらく大きな魔法を使わなければ、徐々に頭痛は引いていく。それでも頭痛が治る事はない。寝なければ完全には回復できないのだ。
気を紛らわすためにも会話を続ける。

「なんなら鳥にでもなつて空でも飛んでいくか？」
「変身魔法も出来るのね。どちらにしても、その魔法も負担が大きいわよ」

「……………」

地味なくせに負担が大きいのか。

「それに、いい加減にその漏れ出てる魔力、どうにかしてくれない？
横で見ている、すごく勿体ないわ」

私は溜息をついた。

「どうやったら止める事が出来るんだ？」
「知らないわ。むしろなんで出来ないのかが不思議ね」
「……そんな基本的な事なのか？」

「意識しなくても普通は出来るわね。そんな状態で魔法を使うなんて、なかなか無謀だわ」

基本的な所から始めずに、いきなり応用から始めたようなものだろうか。下手に出来るから、加減が出来ずに調子に乗ってしまう。調子に乗るから無駄に乱発する。結果として身体が不調を訴えてくるわけか。いっその事、全く使えなければいいのに。

「その割に魔力切れしない。だから逆に限界まで使い過ぎてしまうのね。羨ましいようで、羨ましくない体質ね」

随分と直球な評価だ。普通はもっと遠回しに言ってくるのだが、クリアルスのははっきりと言葉にする人物のようである。だが、その方が私としても気が楽だ。

「クリアルスはなぜ、魔堕ちしたのか分かるか？」

「あら、それを聞いちやうの？」

「いや、言いたくないなら別に言わなくてもいい。ただ、気になっただけだ」

「答えないとも言ってないわ。もっとも分からないのだけれど」

私はクリアルスを凝視する。やはり飄々としていて、掴み難い。

「あら、そんなに熱い眼差しを貰ったら困るわ」

「こっちは反応に困るんだが？」

「お互いに困っているわね」

「その通りだな」

埒が明かない。

「そんな事より、どこに向かっているのかしら」

「どこだと思う？」

「さあ、どこかしら」

「私も知らない」

不毛な会話だ。

「あら、もしかして、迷子になったの？」

「その場合、お前も道連れだな。厄介な道連れだ」

だが、気を紛らわすのにはもってこいだった。頭痛を、一時的に意識の外に追いやる事ができる。

「そんな事、言わないで欲しいわ。魔王さま」

私は足を止めた。振り返ると、クリアルスは不思議そうに首をかしげている。

「なぜ、分かった」

「あら、本当だったの？ 冗談のつもりでいったのに」

「……………」

「冗談よ、そんな顔しないで。」

魔族の気配を消しているといっても、精霊はなんとなく気付くよ。嫌われてもいない様だけれど、魔力の量が多いのにそれは不自然すぎるわ。それだけの魔力を持っているのに、精霊が積極的に近付こうとしないもの。訳ありだと、すぐに分かったわ」

どうやら精霊の様子から気付いたらしい。確かに、精霊は私を避けようとしなない。ただそこを漂っているだけ。今も目を凝らすと精霊の姿が見えるが、彼らは特に私に関心を持っていないようだ。ク

リアルスにいたっては、魔族の気配を消しているのにも関わらず、精霊は彼女を避けていた。

「あら、悲しいの？」

「さあな。どうでもいい。さっさと行くぞ」

「目的地もないのに？」

「とりあえず、街道沿いに進む」

クリアルスは周囲を観察し、方角を確認する。

「この景色……この先は多分、ニルの街ね。わたしたちにとっては鬼門だと思うけれど」

「そうなのか？」

「ええ。ニルの街は精霊に好かれた街。魔力が強い人も多いし、精霊の姿だって見える人もいる」

私はその言葉に引っ掛かりを覚えた。

「待て。それだと、精霊の姿は見えないように聞こえる」

「その通りだけど」

「私は目を凝らせば普通に見えるぞ。それにさっきの口調だと、お前も見えているように聞こえたが」

私は魔族だから目を凝らす必要があるのだと思っていた。だが、それが理由ではないらしい。

クリアルスは微笑む。

「わたしには精霊の姿は見えないわ。ただ、なんとなく漂っているのが分かるだけ。雰囲気理解しているのよ。私みたいな人も珍しいのだけれど、普通は精霊の存在を感じる事すら出来ないわ」

「なぜ、差が出来る」

「理由としては魔力の量とも言われているし、質の違いのせいとも言われているわね。もっとも、どれも違うらしいわ」

「ようするに、分からないわけか」

「そういう事ね」

私は漂っている精霊に手を伸ばす。避けようもしないが、近寄ろうともしない。クリアルスは避けるのに、なぜ私は避けられない。私が魔王だからか？ それとも空気のように思っているのか？ 私は漂っている精霊を適当に掴んだ。クリアルスは目を丸める。

「ずいぶんと大胆ね」

精霊は掴まれても、特に嫌がる素振りはいしなかった。むしろ、不思議そうに首をかしげている。顔は見えないが、雰囲気からそう推察した。

——精霊って、美味しいんだろうか。

唐突にそんな疑問が首をもたげる。本当に唐突だった。それは衝動といってもいい。

気が付いた時には、私は精霊を食べていた。

第10話（後書き）

番外編として「気になる変わり者」を投稿しました。本編とは全く繋がりはありません。非常にのんびりとしています。脱力系です。別物として読んでも大丈夫です。ずっと切羽詰まっているのを書いていると、疲れるので自身の癒しのために書き始めました。

さて、誰が魔王さまでしょうーか。

第11話

美味い。^{うまい}

私は目を細めた。

口の中で溶けたそれが、身体の中を循環していくのが分かる。頭痛も少し引いた。完全に頭痛がなくなった訳ではないが、それでも気分が良い。

もっと、食べたい。

初めての感覚だった。

身体が満たされる感覚。幸福感に包まれる、とはこういう事だったのだと思う。身体がぽかぽかする、とかそういった物ではなかった。だが、身体から余分な力が抜け、リラックスした状態になるのだ。

「あら、そんなにおいしかったの？」

私はその言葉に我に返り、クリアルスを見た。

「……私は、何をした」

「精霊を食べたわね。まさか、食べるとは思っていなかったわ」

「私も食べるつもりはなかったんだが……」

気が付いたら食べていた。クリアルスが声をかけなかったら、そのまま精霊をもっと食べていただろう。本能の赴く^{おもむ}ままに。

「それにしても、精霊っておいしいの？」

「ああ、非常に美味かった。おすすめだ」

クリアルスは宙に浮いている精霊を見つめた。しかし、その視線はどこかずれている。雰囲気しか分からないというのは本当のようだ。

「無理ね。わたしには精霊が見えないから掴めないもの」

「そうか、残念だな」

じゃあ、私が独り占めしても大丈夫だな。

私は完全に精霊を食糧と見なしていた。不思議な事に精霊は私に對して、先程と変わらず無関心である。仲間が食べられても気にならないのだろうか。

「全然、残念そうではなさそうね」

「ああ。正直、誰かに分けるのが勿体ないくらいだ」

私は精霊を掴む。

彼らは私に對して全く警戒心を持たない。不自然なほどに。

「君たちは、一体なんだろうな。私は君たちをとっても美味いと思うが、変じゃないか？　つまり、私——魔王は君たちにとっての捕食者なのだろう？　なぜ、逃げない。なぜ、警戒心を持たない」

生物としておかしいと思う。精霊って、そもそも有機物なのか？　普通のご飯みたいに食べれるモノなのか？　さっきも食べた、といより溶けた、と表現した方が正しい。

まあ、美味しい事には変わらない。おいしいは正義だ。誰が何と言おうと、これだけは正しい。

「……気のせいかも知れないけれど、私よりも優しく接していないかしら」

なんだか声も優しい気がするわ、とクリアルスは呟いた。

「気のせいではない。美味しい物にはそれ相応の敬意というものを払う必要がある。最低限の礼儀はちゃんとあるのだぞ、私は」

「食べるのに？」

「食べるからこそ、だ」

そういうモノなのかしら、とクリアルスは首を捻っている。

「理解してもらおうとは思わない。ただ私はそうしたいから、そうするだけだ」

私は掴んだ精霊を手の平に置き、撫でた。精霊は気持ち良さそうに、なされるがままになっている。

（ますます不思議だ）

魔王は精霊を食べる事が出来る。しかし精霊は魔王に対して警戒心を持っていない。魔族であるクリアルスは避ける。それなのに捕食者であり、魔王でもある私が掴んでも、触っても何の抵抗もしないのは不思議な事のように思えた。

私は再び精霊を口に入れようとした。けれど先程と違い、今度は食べる事が出来ない。口に入れる事に、罪悪感を覚えたのだ。

（さっきは気が付いたら食べていた。不可抗力だったんだ）

私は精霊を口元から離す。

（精霊は、無邪気すぎる）

私には食べる事は出来ない。だが先程は、私ではない誰かが身体を動かしたようだった。

私は、本当に私なのだろうか？

自分の意志とは関係なく動く身体。無意識の内に使われる魔法。仮にそうだとしても、私にはどうしようもない事だと判断する。私は気にしない事にした。

（精霊と、仲良くなりたい）

けれど、それは無理な話だ。私は精霊を食べる者で、精霊は私に食べらるモノだ。せめて、私は精霊を大切に扱う事にしようと思った。

私は精霊を撫で、空へと放す。精霊は私の頬を撫で、どこかへと去って行った。

私とクリアルスは再び街道沿いに歩き出す。鈍い頭痛が残っているが、気になる程でもなかった。精霊のお陰だ。私は、食べた精霊に感謝した。

「それで、ニルの街に行くのかしら」

「クリスはどう思う」

クリアルスの名前は長いので、省略して尋ねる。勝手に省略したのだが、クリアルスは気にしていないようだ。

「あら、省略されちゃったわ。――個人的には避けたいけれど、避けようがないっていうのが本当の所」

「なら決定事項だったんだな」

私はクリスに目を向けるが、クリスは微笑むだけだった。

「そうなるわね」

食えない人物だ。気を抜くと、痛い目を見るだろうか。だが、彼女はそこまで非情な人間だろうか。いや、人間ではなく魔族だったな。私にして見れば、どちらも同じだが。

（まあ、同行する事に変わりはない）

驕おごっているわけではないが、私は彼女の好きにさせる事にした。

クリスが信用出来ようが出来なろうが、私が独りである事に変わりはないのだから。

第11話（後書き）

精霊って、どんな味がするのかな。

第12話（前書き）

戦闘描写あり。二人とも、容赦ありません。
変換ミス直しました。「自身」↓「自信」。

第12話

ニルの街に着いた頃には日が暮れかけていた。日が暮れていたら門が閉じられ、街の中に入る事は出来なかったそうだ。それ以外は何事も問題なく、ニルの街に入る事が出来た。

精霊に好かれた街、と言われていている事もあり、精霊が要塞よりも多くいる。ふわふわ光りながら浮かぶ精霊のお陰で、道がうっすらと明るい。これは普通の人も同じように感じるようであった。

精霊の明かりのお陰で、この街は夜も活気がある。陽気な笑い声が通りに響いていた。

「とりあえず、休めそうな所を探すか」

「だったら、宿屋に行く必要があるわね」

「クリスは金を持っているのか？」

私はクリスに振り返って聞いた。

クリスは首を振る。

「残念だけど、要塞の宿に置いてきてしまったわ。魔堕ちしてから堂々と宿に戻る程、馬鹿じゃないわ」

「……持ち歩いてもいないのか」

クリスは微笑んだ。

「わたし、余分な物は持ち歩かない主義なの」

お金は余分な物なのか？ 普通、肌身離さず持ち歩く物だろう。この世界ではそれが普通なのか？

「だったら宿は無理だ」

「あら、あなたも一文無し？」

「持っているように見えるか？」

「さあ？ わたしはあなたと知り会って間もないから、まだ分からないわ」

確かにそうだが、私は最低限の警戒心は持っているつもりだ。お金の入っている物は常に肌身離さない。この世界に来る時は、強制的に手放されたが。

「宿に泊まりたいのなら、金が必要だ。まずは仕事を探す必要がある」

「そんな事しなくても、簡単に手に入れる方法があるわよ」

「そんな方法があるのか？」

クリスはにっこりと微笑んだ。

「ついて来て」

なんとなく嫌な予感がしたが、私はクリスの後ろをついて行く。クリスは人気のない路地に入り、周囲を見回した。

「ここでいいわ」

「……なんとなく予想はつくが、一応聞こう。何をしようとしている」

「実演した方が早いわ」

すぐにも動きそうなクリスを睨み、その場に押し留める。

「口で言え」

「あら、女にそんな事を言わせるつもり？」

「言えないような事なのか」

「そんなに睨まないとくれるかしら。」

そんなに悪い事じゃないわ。ちよつと路地に人を連れ込んで、適当に遊んだ後、貰^{もら}うもの貰^{もら}って逃げるだけよ」

…………それは俗に言う、追い剥^はぎではないだろうか。

「アウトだろ。そもそも、目立つような事はするな。クリスはただでさえ、目立つ容姿をしているんだ。それに、誰かに見つかったみろ。捕まるだろ」

この世界の常識は知らないが、普通は駄目だろう。

「あら、当然だけど見つからないようにやるわよ。心配しなくても大丈夫よ。こう見えても、失敗した事はないわ」

「いや、駄目だろ。少なくとも、私はそんな奴の隣を歩きたくない」

いつ寝首を搔かれるか心配する日常なんて、ご免だ。

「……冗談だったのだけど」

「とてもじゃないが、冗談に聞こえなかった」

私が賛成していたら、確実に実行していただろう。

「でも、カモが釣れたわ。こういう場合は、正当防衛よね」

私もずっと気付いていたが、あえて放置していた。

私たちの周囲を囲む様に、五人の男がいる。前に三人と後ろに二人。完全に退路を断たれていた。私は大きく溜息をつく。

(めんどくせえ)

どうして、こういった厄介事が常に起こるのか。この世界に来て、厄介事のない日などない。

「おい、痛い目に遭いたくないなら、金目の物をだしっ」

男が言い終わる前に、クリスはその顔面に蹴りを入れていた。見事に入っている。男はそのまま後ろに倒れた。他の四人は呆氣にとられている。

「あからさま過ぎて、品がないわ」

強盗に品を要求する方が間違っているだろう。それとも、そう思う私がおかしいのだろうか。クリスがあまりにも堂々としている所^せ為^いで、自信がなくなってきた。

「強盗に品があったら、逆に怖いだろ」

「あら、そうかしら？ 紳士的な追い剥ぎだと、たまに何もせずに相手からお金を貰える事もあるのよ」

「そんな奴、いたら見てみたいものだな」

「もう見てるわよ」

「……………」

なぜだろう、とても反応に困る。

それとも、反応に困る私が間違っているのか？

「そんな事より」

クリスは指で何かを弾いた^{はじ}。後ろで呻く音^{うめ}が聞こえる。振り返ると、男が顔を押さえて悶えていた^{もだ}。

「油断は禁物よ？」

にっこりと、これまでにない最上級の笑みをクリスは浮かべる。

もしかして、こいつは俗に言う戦闘狂ではないだろうか。

「……………そうだな」

しかし、今はそんな事を考えている場合ではない。私は意識を切り替える。

残っている強盗は三人。私は後ろから迫って来た男を避け、膝を上げた。すると、見事にそこに男の腹が入る。

「ごふっ」

唾が付きそうになり、私は反射的に男の頭に肘打ちをかけた。男はそのまま勢いよく地面に倒れ込む。その間、クリスは二人を沈めていた。活き活きとして、とても楽しそうである。

「あなたも意外に容赦がないのね」

「いや、つい反射だな」

それにお前ほどでもない。

「魔法を使うかと思っていたわ」

「私も使うかと思っていたが、反射的に身体が動いていたんだ」

クリスはしゃがみ込み、男の懐を探る。目的の物を発見すると、それを懐に入れた。意識のある場合は、手刀で意識を奪い、そのまま手慣れた動作で同様に懐を探って奪っていく。

これではどちらが強盗か分からない。

全員から財布を頂戴したクリスは、私の視線を受けてにっこりと微笑んだ。

「これは慰謝料よ。迷惑料とも言わね」

「……そうだな。そう思っておこう」

私の心の平穩の為^{ため}にも。

なんかクリスの所為で、どんどん染まっていつているような気がする。悪い方向に。

第12話（後書き）

ちなみにクリアルスはズボンです。スカートではありません。ち
よつと想像していた方はすみません。
旅をしているので軽装なのです。

第13話

上機嫌で宿をとるクリスを横目に見ながら、私は宿の中を観察した。

綺麗、というよりも清潔に保たれている宿だった。一階部分は酒場を経営しているようで、ずいぶんと人が多い。宿の受付から酒場は離れているはずなのだが、酒の臭いが私の所まで臭ってきた。私は酒の臭いだけで酔えてしまう体質である。その所為か頭がぼんやりとしてきた。

「二階の奥の部屋だそうよ」

クリスに声をかけられて、なんとか頷く。クリスに案内された部屋へと入り、私は速攻でベッドに沈んだ。

「わたし、ちょっと飲んできて良いかしら？」

好きにしろ、と私は手を振る。クリスが上機嫌で出て行くのを音で聞き取った。

私は咄嗟とつひやに近くにいた精霊を掴む。しばらく精霊を見ていたが、朦朧もうろうとする意識も手伝い、いつの間にか口に入れていたようだ。身体が少し軽くなり、頭もはっきりしてきた。

精霊って、酔いにも効くのか。

身体のだるさ、頭痛、果ては酔い。この分だと腰痛や肩こりにも効きそうだ。しかも美味うまいとくる。良い事尽くしだ。もっとも、精霊を食べるのは私くらいしか、いないだろう。他にもいたら、精霊は一気に絶滅しそうだ。

私はベッドから立ち上がり、気分転換も兼ねて部屋の窓を開ける。陽気な精霊たちが、涼しい風と共に入って来た。私は以前よりも精霊の姿が見えやすくなっている事に気付く。目を凝らさずとも、精霊の姿を見る事が出来るのだ。

（精霊を食べたからだろうか）

私は近くにいた精霊に手を伸ばした。すると、精霊はしばらく手の周囲を漂っているかと思えば、不意に私の手を掴んだ。精霊は私から何かを吸い上げているようだった。しかし、それはあまりにも微弱で、何を吸い上げているのかは分からない。

（まあ、いいか）

私は精霊の好きにさせた。ベッドに座り、精霊を観察する。

精霊は淡い赤色をしていた。よく目を凝らすと、栗鼠りすのような姿をしている事に気付く。小さな栗鼠が私の指を両手で掴んでいるのだ。そこから何かを懸命に吸い上げている姿は、なんとも愛らしかった。この世界に来て、ようやくまともな生き物と出会えた気分だ。（これまで厄介事ばかりだったから、余計にそう思うんだろうな）しみじみとそんな事を思った。

しばらくして満足したのか、精霊は離れる。

「もういいのか？」

私は反応を返さない精霊を見送り、そのままベッドに倒れ込んだ。マントを羽織ったままだったので、脱いで、毛布代わりに被かぶせる。もちろん、ベッドには普通に布団があるが、使わなかった。

精霊たちは変わらず、私の周りを浮かんでいる。しかし、先程の精霊のように姿までは見えないし、近寄ってこようともしない。

（さっきの精霊が変わっていたのか）

つまり精霊には差異が生まれる程度は、自我が存在するという事だろうか。好き嫌いが存在している段階で、想像はしていた。だが、先程の精霊が例外だったという可能性もある。

（しかし、精霊は動物の姿をしているのか……？）

一度しか見た事がないのに、それで全てがそうであると判断するのは早計だろう。

（でも、だとしたら余計に分からない）

私は精霊を食べる側だ。食べられる側は、本能的に逃げるのが普通だろう。

「分からないな……」

（分からないと言えば、クリスマスもそうだ。クリスマス程の実力の持ち主なら、初めから……）

そこまで考えて、私はある事に気付いた。クリスの今までの言動を思い出し、ようやく理解する。そして、その事に深く安堵している自分に気付く。私はやはり子どもだったのだな、と自覚した。

（それとも、これは普通の事だろうか）

私の意識は暗い海に沈んだ。

朝、起きたらクリスが私を覗^{のぞ}いていた。

「……なんだ」

「いえ、あまりにも起きるのが遅かったから、調子が悪いのかと思
って確認していたの。その様子だと、別に問題はなさそうね」

私は上半身を起こし、クリスに胡乱^{うろうん}な眼差しを向ける。

「あら、何かしら？」

「あんたは、ここでお別れか？」

元々、クリスは一人でも平気であつたはずなのだ。要塞を出る時
に同行した口実が、どうも解^げせなかつたが、今はなんとなく分かる
気がした。

「さあ？ あなたはどうしたいのかしら」

いつものように、はぐらかす様な返しである。

「正直に言おう。厄介事を起こさないと約束するなら、ついて来て
欲しい」

クリスはにっこりと笑う。

「喜んで」

クリスは、初めから私を助けるためについて来たのだ。騎士に囲
まれた時はともかく、要塞から脱出するならば、体調の良くない私
など見捨てるのが普通だろう。だが、それをしなかったのは――

「わたしは初めからそのつもりだったのだけど、ね。あなた、どう
見ても世間慣れしていないようだったし」

私は苦笑する。

「クリスは逆に色んな意味で慣れすぎだろ」

「そこがわたしの魅力なのよ」

「そうか」

私はようやく、本当の意味で同行者を手に入れたのだった。

第14話

下に降り、二人は朝食を摂った。昨夜は酒場となっていたが、日が昇っている間は普通の飲食店として経営しているようだ。私は食事が必要とは思えないが、クリスが食べているのを眺めているだけでは癪しゃくだったので、適当な物を注文して食べた。

「それで、これからどうするのかしら」

食事を食べ終わり、一段落した所でクリスが尋ねてくる。

私は考えた。

私の旅は、最終的には魔族を助ける事を前提にしている。しかし、私にも魔族にもこの世界の知識と常識が欠落していた。そのため、私は人のいる場所に向かう事を決めたのである。つまり当初の目的としては、この世界における正しい知識を手に入れる事だ。

「クリスは魔族と人について、どこまで知っている」

「さあ？ 詳しく知っている人の方が珍しいんじゃないかしら。魔族に関してもそうだけど、魔族に関する知識はほとんど皆無といって間違いないわ。何しろ、わたしたち人間は魔族を避けているのだから」

確かにそうである。しかし、脅威だからこそ、知ろうとは思わなかったのだろうか。

「それに、わたしたちも魔族を避けているけど、魔族もわたしたちを避けているわ。そんな状況でお互いを知ろうとする方が難しいと思うけれど」

「だが、魔堕ちに関しての知識がもう少しあったって良いんじゃないな

いか？ 魔堕ちの原理が分かれば、対策を立てる事だって出来るだろう」

「それもそうだけれど、魔堕ちするのは人だけではないし、動物も植物も魔堕ちするのよ。道具だって魔堕ちする事があるわ。だから、突発的な自然災害のような物として受け止められるのが普通ね」

随分と大雑把なものだ。だが不特定多数の物が原因も分からず、魔堕ちするならそう考えられても仕方ない所がある。未知の物に対して、人は本能的に恐怖を覚えるのだから。

「人は魔族の事をどう思っている」

「天敵ね。魔族の魔力は人に対して酷い不快感を与えるのよ。魔族から見た人はどうか知らないけれど、少なくともそんな物と一緒に生活したくはないでしょうね」

「別に魔族が人を害しているわけではないのか」

「積極的に害そうとしていないけれど、近くにいただけで不快感を与えられるなんて、相当苦痛よ。わたしはご免だわ」

やはり、魔力が問題なのか。不快感を与えないような魔力であれば、ここまで忌避されないだろうに。そこまで考えて、要塞で聞いた話を思い出した。

「そういえば、魔族でも不快感を与えない魔力を持っている奴もいるんだろ？ そいつらも同じように避けられるのか」

クリスは少し考えてから答える。

「普通は魔族、というだけで嫌われるわ。一人でも魔族を受け入れると、どんどん増えて行くのだから仕方がないけれど」

「そうなのか」

「あなたは魔族と人間が一緒に仲良く暮らす事を考えているようだけれど、それは無理よ。もっと、はっきり言わせてもらおうなら、魔族と人間が仲良く過ごす事なんて不可能。それをする位なら、人と魔族の住み分けをはっきりさせる方が簡単だわ」

難しい話になってきた。

「要するに、ここから先は魔族の国、ここから先は人間の国、といった具合に分けるのか？」

「だいたいそんなものね。それにしても、魔堕ちした人に対する対応を考える必要もあるけれど、そちらの方がずっと簡単よ」

ふむ、と私は腕を組む。

「とりあえず、一度ここを出た方が良いわね」

クリスは私の背後を示す。振り返ると、遠くから怪訝そうにこちらを見ている店員がいる。

「無駄話は外でしろって事。それに、話の内容的にも人前でするような物でもないわ」

「それもそうだな」

私はクリスに同意して、外に出た。

「それで、さっきの話だけれど、そもそも住み分けをさせるには交渉する必要があるわね。知っての通り、魔族は嫌われ者。土地に住みつこうとするのを、人は許さないのよ」

「なぜ」

「自分たちが使うはずの土地を、奪われたくないのよ」

「それは随分と、身勝手な話だな」

「仕方ないわ。そういう生き物だもの。けれど、魔族だって魔力が弱いと食べる物は必要だわ。わたしはそれほど必要とは思えないから、問題はないのだけれど」

私は召喚された時に見た、魔族の集落を思い出す。

荒涼とした大地。見渡す限り、砂しか存在しない土地。あんな土地では作物を育てる事は困難だろう。

「食糧か……」

「魔族が追いやられるのは、雑草すら育たない土地。だから、魔族は人の傍に集落を作る。まだ食糧を掠め取る事が出来るもの。けれど、増え過ぎれば更に追いやられる。当然、魔族の住んでいた土地を奪って、ね」

そこで私は疑問を覚えた。

「待て。何もない土地なのに、人が住み着くのか？」

何もない土地だからこそ、人がいなかったはずだ。何も育てられない土地を魔族から奪うなんて、変な話である。

そこでクリスは首をかしげた。

「言ってなかったかしら。魔族が去った後の土地は、とても作物が育ちやすいのよ。例え不毛の大地であっても、砂漠であっても、必ず作物が根付く。だから、人はわざわざ魔族を近くに住まうのを放置するのよ。そして、ある程度いついた所で追い出す」

どういう事だ？

私は首を捻ったが、そう考える事態ではなくなっていた。

「ようやく、見つけたぞ！」

私たちは、騎士団に囲まれていたのだ。

第14話（後書き）

ほとんど説明となくなってしまいました。作者ですら初めて知る設定がたくさん出てきます。……クリスマスさん、物知りですね。

第15話

騎士団に囲まれ、私は考えていた事を一先ず置いておく事にした。

「あら、心当たりがないのだけれど」

クリスは変わらず飄々とした様子で対応する。よくやるよ、と私は内心で溜息をついた。

（正直に言わせてもらうなら、心当たりがあり過ぎて分からないんだが）

クリスと会ってからでも、いくつか問題を起こしている。

（クリスを助けた時に騎士とやりあった事か？ それとも昨日の追剥ぎを返り打ちにしたことか？）

この世界に来てからなら、魔力を垂れ流して騎士を呼び寄せた事。要塞に行く時に馬車からマントを無断で貰った事が上げられる。

ふむ。思ったよりも問題は起こしていないな。

私はそう結論付ける事にした。

「昨日、喰らった蹴り、俺は忘れていないからな！」

どこかで聞いた様な声が耳に入り、そちらに目を向ける。そこには鼻に大きなガーゼを張り付けた男がいた。昨夜、クリスが顔面に蹴りを入れた男である。

「そんな事、したかしら」

クリスは本当に心当たりがないように、首をかしげた。これが演技だとしたら、大したものである。私はなんとなく、クリスが本気で言っているような気がした。

男はクリスの態度が気に入らなかったのか、更に声を張り上げる。

「その後、俺達から金を奪っただろ！」

「あら、そんな野蛮な事をした覚えはないわ。慰謝料として貰った記憶はあるのだけれど」

よくもまあ、そんな事を本人の目の前で言えるな。

案の定、男は顔を真っ赤に紅潮させた。男の握っている拳が震え、男の周囲に精霊が集まり始める。

「クリス。私は問題を起こすな、と言ったはずだ」

「この場合は、問題の方が寄って来たのだけど」

確かにそうだが。

「それに油を注いだのはクリスだろう」

「だって、張り合いがないじゃない」

狙って煽^{あお}っていたようである。この戦闘狂が、と私は小さく呟いた。

「あら、今なんだか褒められた気がするわ」

クリスに何を言っても駄目な気がしたのは、気のせいだろうか。気のせいだと思いたい。

「待て、こんな街中で攻撃の魔術を使う事は禁止されている」

騎士の一人が男を抑えつけようとする。しかし、男はそれを振り

払った。

「うるせえ！」

男の周囲に集まっていた精霊が、私たちに敵意を持ったのを感じる。そういえば、私は精霊魔術を正面から見るのは初めてである。ほんの少し、楽しみだ。

今までは無色だった精霊が赤い色に染まっていく。小さな精霊たちが身を寄せ合い、次第に大きな赤い光りの塊となった。私はそれを見守る。

「炎の精霊よ、あいつらを焼き尽くせ！」

赤い光りの塊が熱を持ち、炎へと変わる。しかし、反対に私の心は妙に冷めていく。

夢が壊れた。

私はもう少し呪文っぽいのを想像していたのだが、期待外れもいい所だ。

私は正面に手を伸ばし、何かを潰す様に拳を握る。

「圧縮」

それと同時に、男の周囲に渦巻いていた空気を圧縮した。燃え広がろうとしていた炎が、一気に消え失せる。

「なっ……」

絶句する男を、私は睨みつけた。男は私の視線を受けて、怒りを露^{あら}わにする。

「貴様、何をした！」

「別に」

そんなしょぼい技、精霊にとっても願ひ下げだろう。私としても願ひ下げだ。

隣でクリスが「意外に好戦的なのね」と言っているのが聞こえた。

「別にそういう訳じゃねえ。夢が壊されてイラついたただけだ」

クリスは驚いたように目を丸めたが、すぐに微笑みを浮かべる。

「やっぱり、あなたとは気が合いそう」

褒められている気がしない。

「そいつは、どうも」

私たちは男と騎士の横を通り過ぎ、街の中を散策する事にした。クリスが男とすれ違い様に、男の腹に拳を入れたのに気付いたのは、果たして何人いただろうか。背後から男の呻き声と、それを氣遣う騎士の声が聞こえた。

「お、覚えてろ！」

無理だろ。

クリスに至っては、完全にはない者として扱っている。私もそれくらい凶太くなりたいものだ。

……今、危険な事を考えていたような気がする。

私はあえて、それ以上深くは考えない事にした。

「それで、どこに行くのかしら？」

隣を歩くクリスを見上げ、私はある事を思い出す。

「そういえば、クリスの人相は割れていないのか？」

クリスが魔堕ちする際、周囲には多くの人がいた。何人かがクリスの顔を覚えていても不思議はない。むしろ、これだけ美人なのに覚えていない方が不思議である。

「それなら心配はいらないわ。だって、魔族は黒い靄もやのようなものに覆われているから、姿を把握するのが難しいのよ」

だが、私の時は姿を見られていたような気がする。

「まあ、それも個体差があるけれど」
魔王だから、なのだろうか？

私はそうか、とだけ返した。

第15話（後書き）

久しぶりに主人公が主人公らしい事をしました。口調も久しぶりに崩れて、普段はなんだかんだで我慢していた様子。

……しかし、魔王さまのくせにクリスに飲まれてるよー。もつと頑張れ！

第16話（前書き）

説明文が黒いです。結論が最後にあるので、流し読みでも構いません。

本文中にある「学生」は高校生という意味です。

第16話

騒動の場から離れたものの、注目を集めている事は否めなかった。そもそも、この世界において私の容姿は浮いている。黒い髪はそれほど珍しくはないが、黄色っぽい肌の人はいないのだ。更に隣には、美人として分類されるクリス。これで目立つな、というのは至難の業である。

「それにしても、さっきはあなたの意外な一面を見て楽しかったわ」

私はクリスに対する認識を改めたぞ。口には出さないが。

「この前も思ったのだけれど、あなたの魔法は変わっているわね」
そうなのだろうか。

「そんな事よりも、これからの事だ」

クリスは私の言葉に釣れないわね、と肩をすくめる。

「とりあえず、当面の目標は出来たな」

魔族に安全な土地を与えること。それが第一条件。

ただし、この場合は人との交渉が必要である。

(……………?)

私は、その事に何故か違和感を覚えた。強いて言うなら、何かを見落としているような不安の様なものだ。しかし、何を見落としているかが分からなかった。

「あら、人間の王様に直談判でもするのかしら」

「直談判をして、はいそうですか、なんて正直に聞くと思いませんか？」
「思わないわ」

人には立場というものが存在する。私はただの学生であったが、そういうものは観察してきたつもりだ。立場に見合った交渉の仕方をしなければ、そもそも聞こうとすらしない。

「だから、外側から埋める」

「あら、どうやって？」

「王様が、私の交渉を呑むように仕向ける」

「具体的には、どうするのかしら」

私は腕を組んで考える。

一番手っ取り早いのは、私が魔王である事を人に認知させること。それも王の目の前で。

そうすれば、私を無碍むざに扱う事は出来ない。王の懐ふところに入り込んでいる状況であり、なおかつ、私の魔力に対抗できるような人はいないのだから。もっとも、それがどこまで信用していいのかは分からないのが欠点だ。だとしても、強い事には違いないだろう。

要するに、これは人間を脅す行為だ。

そうなる、後に禍根かこんが残る場合がある。むしろ、必ず残るだろう。私だったら、恨む。一番手っ取り早い、結果的には良くない。将来的に私がいなくなる事を考えたら、確実に却下だ。

二つ目は、国王に対して強い発言力を持つ人を吸収する事。

どれだけ強い権力を持っている人であっても、周りの全員が白の事を黒だといえ、白であっても黒になる。たった一人が白の事を白だと言ったとしても、例えそれが正しかろうが受け入れられない。それと同じように、魔族の国をつくる事が良い事だと思わせれば良

い。

だが、これは欺あざむいているに過ぎない。

受け入れられれば問題はない。一度受け入れたモノを引っくり返すのは至難の業だ。警察の誤認逮捕が良い例である。例え無実であると分かっているとしても、周囲がそれを受け入れない。受け入れたくないのだろう。良い悪いの問題ではない。謂いわれのない罪を受ける本人にしてみれば良い迷惑では済まされないだろうが、それ以上に大きな過あやまちを認めるのが難しいのだ。私だったら、目を逸らす。

だが、結局は向き合わなければいけないものだ。腹を括くられれば、こちらの負けだ。そもそも、王が周りの意見を受け入れなかった段階で目的は潰つぶえる。

三つ目は、魔族全員で直談判する事。

だが、これは速攻却下だ。そもそも魔族にこんな事が出来ていれば、私は必要ない。まあ、後ろ盾を得る点においては、今はクリアしている。なんてったって、魔王わたしがいるのだから。

しかし、肝心の魔族たちが私に丸投げだ。仮に有志を募ったとしても、温度差が激し過ぎる。それに最悪、人と戦争になる可能性があった。むしろ、こうなる可能性が高すぎる。今まで虐しいたげていた者たちが反発すれば、それを抑え込みたくなるのが人の性さがなのだから。それくらいだったら、私が王様の所に忍び込んで直接交渉した方が、かなりマシだ。

これ以上は浮かばない。そもそも、魔族の立場が低すぎる。それこそ黒光りする楕円形の虫並みに。

うわっ、この想像すごく嫌だ。鳥肌が立ったよ。せめて鼠ねずみにしておこう。まだ可愛げがある。見た目的に。

とりあえず、三つ目は有り得ない。一つ目も最終手段として考えても良いが、却下。結局、残ったのは二つ目だ。一番手間がかかる

し、時間もかかる。

正直、めんどくせえ。だが、やらなければならない。

「そうなるよ、やっぱり情報収集になるな」

「なんだか分からないけれど、そうなるのかしら？」

私は頷く。

「そうなるな。ちなみに、クリスは何か案はあるか？」

クリスはにっこりと笑った。

「あら、それをわたしに聞くのかしら」

「正直な所、どうなんだ」

クリスはそうね、と考える。

「そもそもわたしは、そんな面倒な事をしたくないわ。わたしは魔族である事を隠しながら生活するのに、支障は全くないもの。別に今の状況が最善でもないけれど、最悪でもないから」

私の国お得意の事なかれ主義だったようだ。

「つまり、わたしの様に考えている人も少なからず、いるわ。そうになると、覚悟が必要ね」

クリスは真っ直ぐに私を見つめた。

「敵は、人だけとは限らないわ」

第16話（後書き）

上の考えは魔王さまに浮かぶ範囲の発想です。魔王さまは他人を頼る事を良しとしません。そのため、誰かに相談する事も少ないです。意見は求めますが、最終的な結論は自分で下します。

クリスもその事に気付いていますが、あえて突っ込みません。

魔王さまは自分の枠に当て嵌めてから考えるのが得意なので、魔王さまの感想もそのまま入っています。

第17話

私はクリスの言葉を吟味した。

「……それはつまり、クリスみたいな事なかれ主義は、事を荒げたくない。だから、厄介な者は事前に潰す、ということか？」

「要約すると、そんな感じね。全員がそうとは限らないけれど、可能性としては考えておいた方がいいわ」

確かに、現状で満足しているような人にとって、事態を掻きまわす様な存在は邪魔だろう。

「確かに、そうだろうな」

クリスは腕を組んで考え込む私を観察していた。

「まあ、今はそこまで考える必要性はないだろうけど。――それで、こういった情報を集めるのかしら？」

「王に対して強い影響力を持っている人について知りたい」

「なんとも漠然としているわね。私はこの国の政治については疎いし、手っ取り早く、嚇^{おど}しちゃえばいいんじゃないかしら」

確かに、そう思う。だが、それでは後で困った事になる。それは回避しなかった。

「それに、一体どれだけ聞けば情報なんて集まるのかしら。ただでさえ、わたしたちは目立っているのに」

その通りである。この二人が揃^{そろ}って、こそこそ調べ物なんてそれこそ不可能だ。現に今も注目を集めている。結局相談は人目を気にしていない。一応、周囲に声が届かないように魔法を使っているの

だが、クリスは気付いているのだろうか。

「まあ、手っ取り早く一番大きな屋敷に忍び込めばいいんじゃないか？」

「それ、分かりやすくてすごく良いわ」

情報収集の手段は、いとも簡単に決定された。

「けれど、具体的にはどうやって交渉するのかしら」

私は腕を組んで考えるが、さっぱり浮かばない。

「とりあえず、馬鹿正直に話すしかないな」

元々、人の機嫌を窺う事は苦手だ。そんな事をするよりも直球でいった方が良い気がする。

「まあ、無駄に小細工するのも疲れるし、いいんじゃないかしら」

「じゃあ、それで決定だな」

「ちなみに、断られたらどうするのかしら？」

「そりゃあ……決まってるんじゃないか？」

クリスはにっこりと微笑んだ。

「それって、わたし好みの展開なのかしら」

「そうなるかも知れないな。まあ、話を通じそうな奴にしか言わないつもりだが」

「あら、つまらない」

「事を荒げたくないんじゃないのか」

「それとこれとは話が別」

私はクリスに呆れた視線を投げかけた。クリスは変わらず微笑んでいる。

「それじゃあ、早速この街から行くのかしら？」

「そうなるな」

「この辺りで一番大きい屋敷、といわれても騎士団の所くらいよ」

「それは施設だろ」

「豪華な事には変わりないわ」

なんとも大雑把な基準である。

「だが、騎士団から丸め込むってのも、悪くはないな」

騎士団を丸め込めば、これからトラブルを起こしても、前もってどうにか対処出来るかもしれない。もっとも、失敗した時は大変な事になりそうだが、それは考えないようにする。

「行くか」

「殴り込みに？」

私はクリスに心底呆れたような視線を投げかけた。

「冗談よ」

やはり私は信用する相手を間違ったのかも知れない。

騎士団は城のような建物だった。実際に城なんて見た事はないが、イメージそんな感じだ。灰色がかった石を積んで作られた塀に囲まれ、どこか他人を寄せ付けない雰囲気を持っている。入口には二人

の騎士が立ち、出入りする人や通行人を見ていた。

「ちなみに、正面から行くのかしら」

「こそこそ入った方が逆に怪し過ぎるだろ。部屋に忍び込んできた奴の話なんて、クリスはわざわざ聞くのか？」

「面白ければ。まあ、大抵はわたしの遊び相手になってもらうだろうけれど」

聞く気、ないじゃないか。

「でもいっその事、騒ぎでも起きてどさくさに紛れて入れたら良いんじゃないかしら。そうすれば、すんなり目的の場所まで行けそう」
「そんな都合よく騒ぎが起きるか」

「あら？ わたしは、あなたにあってから静かに過ごせた事なんてないのだけれど」

まだ一日しか一緒にいないだろう。それに、それは私も同じだ。

「どこかに厄介事でも転がっていないかしら」

そう簡単に厄介事が転がっていたら困るだろう。むしろ私としては、クリスの方が厄介事を起こしそうである。そんな事を思いながら見ていたせいか、クリスは微笑んだ。

「大丈夫よ。出来る限り、厄介事は起こさないわ。出来る限り、ね」

その念押しが一番信用ならん。

「それに、起こすにしても、わたしの仕業だと分からなければ問題はないわ」

極端な発想だな。

「あら、やっぱり駄目？」

表情に出ていたらしい。

「やっぱりもなにも、起こすつもりだったのか？」

さっき起こさないと云ったばかりではないか。

「だって、そっちの方が楽しそうじゃない？」

「却下だ」

「悲しいわ」

私はクリスを無視する事にした。

さて、クリスが暴走しない内にやるとするか。どっちにしろ、面倒臭い事には変わりはないが。

第17話（後書き）

前は書いていて訳が分からなくなりました。なので、今回は非常に軽め。

……しかしこいつら、軽口ばかり叩いているせいか、話が進まん。

第18話（前書き）

団長を壮年から30代くらいに変更しました。
考えてみたら、口調が若すぎます。すみません。

第18話

騒ぎを起こさずに入るのは初めから不可能だったようだ。

「お前たち、先程騒ぎ起こした奴らだな」

私は思わずクリスに呆れた視線を投げた。

「あら、わたしだけの所為じゃないわよ。それを言うなら、あなたもそうじゃないかしら」

「私は事前に魔術を防いだけだ。相手に攻撃はしていない」

「それもそうね。初めに仕掛けたのは相手なのだから、この場合、わたしたちは正当防衛になるわね」

クリスの場合は少し違う気がする。

だが、そう思ったのは私だけのようだ。クリスは全く悪びれることなく、確認するように門番の方へと向き直る。

「初めに喧嘩を始めたのは、わたしたちじゃないわ。むしろ被害者よ」

「いや、市街で魔術を使用した者、及び攻撃行為をした者は例外なく処罰される。今回の場合は被害者だという事も考慮に入れられるが、戦意を失った相手に対する暴行の言い訳にはならない」

私はクリスを見た。クリスは変わらず微笑を浮かべている。

「まあ、ここで言い訳をしても仕方ないでしょうから、とりあえず中に入りましょう？」

「……クリスは、遠慮というものを覚えた方が良いな。色々な意味

で」

「そうかしら」

心当たりはなさそうだ。きっと改善は諦めた方が良いだろう。

「団長の所へ案内する」

二人のやり取りを気にせず、片方の門番が誘導していく。結果的に、二人は騎士団の中に潜入する事が出来た。

中は精霊が外とは比較できないほど、多くいる。理由は全く分からない。もしかしたら騎士団に入る条件に、精霊に好かれる事が入っているのかもしれない。

（しかし、なんで団長の所へ？ 簡単な調書でも取って、お説教を喰らって帰れるのかと思っていたが、そんなに厄介な事を仕出かしたのか？）

前の世界でも警察のお世話になった事がないため、基準がわからない。だが、いきなり団長に会うのは変だと思う。

「なあ。こんな事があると、いつも団長の所へ案内しているのか？」

私は前を歩く騎士に尋ねた。騎士は笑う。

「普段はしないよ。それに、あんなに派手な魔術を使う奴を見るのは初めてだったからな。報告したら団長が興味を持ちまったんだよ。悪いな」

やはり、普段は違うらしい。

それにしても、あんな魔術が派手なのか？ 相手の炎の魔術の方

がずっと派手だと思っただが。それより、この口振りだと、この騎士はあの場にいたんだな。ちゃんと男を止めろよ。

「わたしの所為ではなかったみたいね」

隣でクリスが何事かを呟いたが、無視する。

確かに、注目された理由は私のようだ。しかし、元の原因を辿ればクリスだろう。そもそも、挑発する方が悪い。それに、相手も運が悪かった。

今回は、結果的に良い方向へと転がった。もっとも、まだ問題は残っている。

（厄介な事にならないと良いが）

私は早くも、場合によっては強硬手段もやむなし、と考えている。なぜかという、クリスの目が輝いているからだ。絶対に、厄介事が起こる。主にクリスの所為で。

「クリス。挑発するなよ」

「あら、なぜ？」

案の定、クリスは不思議そうに私を見る。思わず溜息が出た。

「初めから喧嘩腰でどうする。あくまで交渉を第一に考えているんだからな」

「第二は強硬手段でしょ。だったら、そのための仕込みをやっておいた方が良くないんじゃないかしら」

「仕込むな」

「あら、残念」

私一人で来た方が良かったのではないだろうか。そう思った所で今更だった。

（めんどくせえ）

気がつくと、騎士が木でできた扉をノックしていた。

「団長。例の人たちを連れてきました」

「おう、入れ」

騎士が扉を開け、中へと誘導する。騎士は役目を終わったとばかりに、一礼をして去って行く。私はそれを見送ってから、部屋の中へ足を踏み入れ――その場を飛び退いた。

部屋の中をよく見ると、精霊の気配はするのに姿が見えない事に気付く。

「あら、どうしたの？」

クリスは警戒しながらも、いつもの調子で聞いて来る。

案内してきた騎士は持ち場に戻ったらしく、この場にはいない。

私は部屋の中にいる団長を睨みつけた。

団長は三十歳ほどの男だ。茶色の短髪に、不精髭を蓄えている。先程の騎士たちとは違う、白を基調とした服を着ていた。男自体は粗野な印象を受けるが、不思議とその服は似合っている。

「なんのつもりだ。それとも、この街ではこれが礼儀なのか？」

「おいおい。ここで危険な算段をしているような奴らを警戒するな、って方が無理だろ」

ここに来るまでの会話を聞いていたらしい。たまに色つきの精霊がいた事を思い出す。不思議と黄緑色をした精霊が多かった気がする。

る。それにしても、この男、慣れ慣れしいな。

「話が読めないのだけれど」

クリスは団長を見つめる。

「なに、簡単な話さ。罍を仕掛けたんだよ」

「あら、ずいぶんと歓迎してくれている様ね」

どんな歓迎の仕方だよ。平和と怠惰を愛する私に、そんな仕打ちはやめて欲しいものだ。

「それで、団長さんはどんな目的でここまで招いてくださったんだ？
ぜひとも、ご教授願いたいね」

嫌味っぽく言い、私は笑った。途端、団長の顔が固まる。

「その表情、やめた方がいいぞ。寒気がする」
失敬な。

「あら、わたしは面白いと思うのだけれど」
それはそれで失礼だ。

「とりあえず、その物騒な魔術を引っ込めろ。あと少しで細切れにされる所だったじゃないか」
見た目によらず、鬼畜な魔術を使う。だが、参考にはなった。使いたくはないけれど。

「へいへい」

男は気のない返事をして、部屋に仕掛けていた魔術を解除した。

（私には呪いでも掛かっているのだろうか。これも魔王としての補
正だろうか）

思わず私はそんな邪推をしてしまった。

第19話

魔術が解除されると、淡い黄緑色をした精霊が大量に現れる。彼らはすぐに、無色に戻った。

「それにしても、よく分かったもんだ。まだちっこいのに凄いな、小僧」

私は眉を顰める。

（元の世界では平均より少し高いくらいだ）

それに、また男と勘違いされた。

「私はこう見えても女だ」

私は部屋の中へと足を踏み入れ、近くにあったソファへ許可もなく座る。座り心地は中々のものだ。クリスは私の後ろを立つに留めた。

「それにしても、ずいぶんと悪趣味な魔術が得意なんだな」

「おいおい、女として見て欲しいなら言葉遣いを改めろよ」

「なぜ、お前の為に改めなくてはならないんだ」

執務机にいた団長は、私の正面にあったソファに座る。団長はクリスを見上げた。

「子どもの教育、間違ったんじゃねえの？」

激しく勘違いされているようだ。

「そうかもしれないわね。わたしだったら、もっと戦いを楽しむよ

うに育てたのに」

その反応もいかがかと。

案の定、団長は苦笑いを浮かべている。会話を聞いてたのであれば、クリスの反応もある程度の予想がつきそうなものだ。

「それで、私になんの用なんだ」

団長は思い出したように手を打った。

「そうそう、忘れるところだった。駄目元で聞くけど、騎士団に入らないかい？」

「あんな歓迎の仕方をして、よくもそんな事が言えるな」

むしろ、危険な会話を聞いたからの対応ではなかったのか？

「ああ。あれはテストだよ。テスト。あんなお遊びで怒っちゃうなんて、お子ちゃまなんだな」

反射的に目の前の男を殴り飛ばしたくなった。だが、そこは自制心で抑える。

「言われちゃったわね」

後ろでクリスが追い打ちをかけた。お前はどっちの味方だ。

私は軽く息を吐いて、自身を落ち着ける。

「それは、本気なのか」

私は目の前の団長を見据えた。

「おうよ。本気も本気。正直、今は魔族の手であっても借りたいような状況なんだ」

「悪いが、説明されないとどんな状況か分からん。生憎あいにくと世間の情報に関しては疎いんでね」

それもそうだな、と団長は頷く。

「魔王が現れたってのは知っているか」

私は顔色を変えずに続きを聞いた。

「みんなは魔王って言うっているが、実際、本当に魔王なのかどうかは微妙な所だ。確認した奴はいないからな。ただ、魔王と思えるほど、その魔族の魔力は桁外れでね。もし、そいつが人間おれたちと敵対するってんなら、手を打たないといけないんだ。騎士団の兵力増強もその対策。勝ち目はないと分かっちゃいるが、足掻くくらいはしないと示しがつかん」

「そのための勧誘って事ね」

「そゆこと。それで、例えば腹に一物あるような奴でも、使えるなら使うつもりでいる」

団長は私とクリスを見つめる。

「あら、ずいぶんと太っ腹なのね」

「おうよ。国の方も躍起になってる。魔族に虐げられんのも、こっちはご免だからな」

「なぜ、虐げられると思うんだ？」

団長は私を怪訝そうに見た。

「なあ、団長。もし仮に、魔族が争いではなく、話し合いの席を求めたのなら、どうする？」

「んな事、ありえないな」

「仮の話だ」

団長は口を噤む。

「国は、どういう対応をするつもりだ」

「……さあな。俺には分からんよ。俺たちは戦えと言われたら、戦うしかない。ただ、無駄死にはご免だな」

「そうか」

どうしたものか、と私は考える。

「団長が判断を下せる立場にいるのなら、どうする」

「正直に言わせてもらうなら、怪し過ぎるね。だが、勝機はない。話の内容によるな」

「魔族の安全の保障に関するものなら、どうする？」

「は？」

団長は眉を顰めている。

「簡単に言うならば、魔族に土地の保障を。魔族に安全な暮らしの保障を。そういうものを求めてきたら？」

「……あいつらに、そんな理性はないだろ」

「あつたら？」

団長は沈黙する。

「魔族が求めているのが争いではなく、安全を求めてきた場合は？
それも話し合いで。あんたは、魔族を受け入れるか？ それとも、
見捨てるか？」

「……………わかんねえよ。一度会ってみて、信用できる奴だったら、
そうする」

「信用できなかったら？」

団長は鋭い目を私に向けた。

「全力で抗う。俺たちの誇りの為に」

「それで結構だ」

団長が警戒心を強める。精霊たちが色を持ち始めた。

「団長。あんたは、私を信用できると思うか」

「さあな。今日会ったばかりの奴を信用しろってのが、無理だろ」

「同感だ」

私と団長の間で緊張した空気が流れる。それを破るかのように、
クリスが声を上げた。

「だったら、手っ取り早くやりあっちゃえばいいんじゃないかしら
？」

二人はクリスを見る。クリスは緊迫した空気を物ともせず、にっ
こりと微笑んだ。

「負けた方が勝った方を受け入れる。とっても簡単よ。
こういうの、好きなんですよ？」

お前と一緒にするな。

だが、良い案でもあった。確かに、手っ取り早い。

「なるほどな」

団長も納得したように顎を撫でている。

「確か、空いている練習場があったはずだ。そこでやりあおう」

「……本気か？」

「おう。断るってんなら、別にそれでもいいぜ」

断るはずがない。

「それで構わない」

「決まりだな」

こうして団長と戦う事になった。

第20話（前書き）

訂正。「聞こえたる」↓「聞こえた」
発見した時ビビりました。

第20話

精霊は通常、無色である。ただ淡く光って、その場を漂っているだけ。

けれど、人が近くにいることによって、精霊は色を持つ。私は誰かが精霊魔術を使っているのを見た事がなかったため、色が変わる理由を知らなかった。だが、炎の魔術を使おうとした男にしろ、目の前の団長にしろ、近くににいる精霊の色はほとんど限られていた。そこから、精霊は近くににいる人の得意魔術によって色を変えるのではないか、と私は推測する。

「思ったよりも、狭いわね」

クリスは練習場を見回し、不服そうに声を上げた。

練習場は中庭の吹き抜け部分である。広さはあまりなく、体育館ひとつ分ほどだ。騎士団の規模がどれ程かは分からないが、大人数で訓練をするには狭いと思われた。

「そうだな。今までは少数先鋭だったから良かったんだが、これからは改善しなくちゃならん」

「悪いが、私は体術は使えない」

暗に魔法しか使わないと宣言する。

「別に構わないさ。一応、結界も張ってあるから外には漏れないだろうし。それに、俺も魔術使う気満々だから」

「そうか。ちなみに、結界は魔力が外に漏れるのも防ぐのか？」

「外に漏れ出るほど、強い魔力を持つ奴はいないだろ」

私は答えなかった。

「そろそろ良いかしら」

クリスは微笑みを浮かべながら二人を見る。

「わたしが参加できないのは残念だけれど、二人が闘うのを見るのも楽しそうだわ。今回は審判として見守る事にするけど、その内わたしも混ぜてね」

「少なくとも、私は断る」

即座に私は拒否した。

「美人の誘いには、断れないな」

団長が茶化す様に言った時、クリスの目が輝いたのに私は気付く。どうやら、団長はクリスの性格を理解していないようだ。内心で憐れに思う。

私と団長は中庭の中心まで歩き、お互いに向き合った。

「悪いけど、俺は子どもに対しても手加減はしないから」
「そうだな。後悔しないように手加減はしない方がいい」

私はにやり、と笑う。団長も笑った。

「合図は……いないわね」

団長が何かを呟く。すると団長の周りを漂っていた精霊が、瞬時に消え去った。

あの悪趣味な技か。

私は団長の周囲の地面を押し上げ、団長を包み込むように閉じ込める。しかし団長は瞬時にそれを切り刻んで脱出してしまふ。風を切る音が聞こえ、咄嗟に伏せたが、わずかに頬を切る。私は立ち上がる反動を利用して後ろに飛びずさった。

「それ、悪趣味だな」

私は団長を睨みつける。

「そうか？ 合理的じゃないか」

団長は始まってから、その場を一步も動いていない。その上、無傷だった。

私は頬を伝う血を拭う。

「見えない武器で攻撃するのは、騎士としてどうかと思うぞ」

「だが、かなりの範囲を一気に攻撃できるんでね。結構、重宝してるんだよ」

私は豪雨を想像する。瞬時にバケツを引っくり返した様な雨が中庭を襲った。団長は咄嗟の事に反応しきれず、ずぶ濡れになっている。雨が止むと同時に、細い糸のような物が見えた。水に濡れて光りに反射しているのだ。その糸はまるで意思があるかの様に動き、私に迫る。

「吹き飛ばせ」

私は豪風でその糸を吹き飛ばす。

「本当に無茶苦茶だねえ」

団長はいつの間にか、私の背後に回り込んでいた。団長は腰の剣を抜き様に切りつける。マントを金属の様に硬くさせるが、マント自体も重くなり、動けなくなってしまふ。

「くそっ」

使い勝手が悪すぎる。

二撃目が繰り出される前に、私は鴉に姿を変える。そのまま団長の背後へと回り込み、強風を起こして団長を吹き飛ばした。同時に刺す様な頭痛に襲われる。

「――ッ」

私はいつの間にか人の姿に戻っていた。頭を押さえるが、表面上は何事も無いかのように平静を装う。

これまでよりは遥かに持った方だが、これ以上強い魔法を使うのは危険であった。

「こんな無茶な使い方して、よく生きていられるねえ」

風を切る音が聞こえる。私は反射的に豪風でそれを押し返すが、酷い頭痛に襲われ、周囲の注意を怠った。背後から剣を首元に突きつけられているのに気付く。

「これは、勝負あったかな？」

私が振り返ると団長はにやり、と笑う。

私は反射的に突風を起こし、団長を吹き飛ばす。

「……………そうだな」

私はふて腐れながらも同意した。

「あらあら。わたしがやった方が良かったかしら？」

クリスは茶化しながら近寄って来る。私はクリスに背を向けた。

「まあ、俺が勝つのも当然と言っちゃあ、当然なんだがな」

団長は立ち上がって汚れを払いながら、笑みを浮かべる。私は顔を背けた。

団長は何が面白いのか、大笑いをしながら私の頭をごしごしと撫でる。この上なく鬱陶しかったが、我慢する事にした。

「いやあ、お前さんは見掛けによらず、ずいぶんと甘い性格をしている」

「分かっていて、それを突くやり方をするなんて大人としてどうかしら？」

私は痛む頭を堪^{こら}えて、鴉へと姿を変える。頭痛を抑え、根性でそのまま飛び去ろうとするが、団長に掴まれた。反射的に元の姿に戻るが、後ろから首を掴まれているため、逃げる事は出来ない。

穴があつたら入りたい……。

足元の地面に大きな穴が空いたが、浮いているため落ちる事はなかった。

「……お前、何がしたいんだ？」

団長の呆れた様な声が聞こえた。私は顔を逸らす。クリスが近くで忍び笑いを漏らしていた。

第20話（後書き）

戦闘描写……もっと頑張ります。
やっぱり武器を持たせたいな……。

第21話

なぜか団長に荷物の様に脇に担がれ、私は騎士団の中を進んでいる。

なんなんだ、この状況は。

なぜか団長は私を放そうとはしない。どちらにしても、頭痛が酷いため普通に歩く事は困難である。しかし、この状況は嫌だった。

「……放してくれないだろうか」

「駄目だな」

即答で返されてしまう。

「いいじゃない。たまには楽をする事も大切よ」

「これの、どこが、楽だというんだ？」

私はクリスを睨みつけるが、当の本人は堪えた様子もなく微笑んでいる。

「だって、普通に歩けないんでしょう？」

「……歩けないわけではない」

「おいおい、あんなだけ魔術使って平気に歩けたら、まさしく化けモンだろ」

「……なら、妥協案だ。クリスに肩を借りて歩く」

「駄目だな」

私は団長を見上げた。

「なぜだ」

「逃げるから」

団長はにやにやと笑みを浮かべながら答える。
私は目を逸らす。

「もう、逃げない。約束する。だから、放してくれ」

「あー……どうしよっかな」

団長はどこか面白そうだ。私はまったく面白くないが。

「頼む」

「やっぱ駄目」

「なぜだ」

「目的地に着いたから」

団長は私を脇に担いだまま扉を開く。病院の診察室のような部屋だった。椅子には白衣を着た男が座っている。

「おや、団長さん。その子はどうしたんですか？」

「頭痛が酷いんだよ」

そんな事は一言も言っていない。それに、クリスを助けた時よりも遥かにマシな状態だ。それほど酷くはない。

「魔法を使い過ぎたのですか。どうせ、団長さんが無茶させたんでしょ？」

「こいつが勝手に無茶したんだよ」

団長は近くのベッドに私を放り投げる。私はベッドの上に着地した。柔らかいのが幸いである。

「おい、怪我人だと言うならもっと丁寧に扱え」

「こんな元気な怪我人がいるかっての」

私はベッドの縁に腰かけた。白衣の男は、私と団長のやり取りを面白そうに見ている。

「それで、わたしたちをどうするつもりなのかしら」

私はそこでようやく本来の目的を思い出す。しかし、闘う必要はあったのだろうか？ その場の流れでそうなってしまったように思える。

「そもそも、なぜ私たちは闘う事になったんだ？」

「勝った方を受け入れる、という条件で闘う事になったのよ。つまり、あなたは相手を受け入れなくてはならないわね」

クリスの言葉に団長は頷く。

「そうだったな。そんじゃ、今日から騎士団に入団ね」

「待て、なぜそうなる」

「当然の流れだろ。お前さんは、魔族を受け入れて欲しかった。それで俺は、騎士団に入って欲しかった。そんだけの事だろ？」

……確かに、そんな感じだった気がする。

「そんなわけで、お前らは今日から騎士団員な」

「あら、わたしは違うわよ。わたしは付き添いのようなものだもの」

なぜこいつは平然とそんな事を言っただけなのか。クリスの様になりたくはないが、少し尊敬する。少し、な。

「そうなのかい？」

団長は私に確認するように尋ねる。私はクリスを見上げた。クリスは相変わらず微笑んでいる。私は溜息を吐いた。

「クリスの好きにさせればいいさ」

「あら、ありがとう。それじゃあ、好きにさせてもらおうわ」

クリスは医務室を出て行く。どこへ行ったのかは私にも分からない。団長もクリスを見送っていた。

「おいおい、仲間じゃなかったのか？」

「確かに仲間だが、たまたま行き先が同じだったただけだ」

そもそもクリスは好きで私について来たただけだ。飽きれば勝手にどこかへ行くだろう。

「だがお前さん、それなりに懐いていたじゃないか」

私は首をかしげる。

「そうだろうか」

「そうだろうよ」

即座に肯定されるが、実感が沸かない。

「まあ、どっちでもいい」

別にどちらでも問題ないだろう。

団長は呆れたように私を見下ろした。

「お前さんがそれで良いならいいが……」

それに、私の目下の疑問は別にある。

「それで、私はどうすればいいんだ？ 団長は私は何者か、分かっているんだろう？」

団長が白衣の男に目配せすると、彼は部屋を出て行った。団長は彼が出て行ったのを見送ってから、口を開く。

「おうよ。お前さんは魔族だろ」

やはり気付かれていたようである。

「そうだ」

「それで、あの馬鹿みたいな魔法から考えると、お前さんが魔王だな」

馬鹿みtainな魔法とはどういう意味だ。

団長は肩をすくめる。

「あんな出力の魔法を連続で使って、その上、それとは別の大規模な魔法を使う奴はいないんだよ」

話が読めない。

「私は複数の魔法を同時には使ってはいないはずだが？」
鴉に変身したまま突風を吹かせたのは別だが。

団長は私を見つめ、心底呆れた様な溜息を吐く。

「お前さん……相当、難儀な性格をしているな」

「そうか？」

「分かってはいたが、本当に無意識だったとは……」

「だから、なんの話だ」

団長は首を振った。

「いいや、なんでもないよ」

私は眉を顰めるが、団長は気付かない振りをしている。

「とりあえず、今日はゆっくりと休むと良い。明日から、しごくかならな」

魔王をしごく騎士団長。

そう考えると、有り得ないような事に思えるが、多分事実だった。

第21話（後書き）

鈍すぎる主人公。次の話で魔王が無意識に一体何をしていたのか、団長かクリスの視点で出てきます。

第22話（前書き）

クリス視点。シリアス入ります。

ふざけていないクリスを初めて書きました。

少し訂正「全面的に同意ね」↓「全面的に同意するわ」
大した違いでもありませんが、訂正しました。

第22話

クリアルスは中庭を渡り廊下から眺めていた。

「誰が見ても、ここで魔術を使った戦闘があったとは思わないでしょうね」

それも大規模なものだとは、誰も思わないだろう。それこそ冗談だと笑われる。

中庭には魔王が無意識に掘った穴を除いて、戦闘の傷跡は一切ない。その上、中庭にある芝生すら、あの豪雨と暴風の中であっても、まったく傷付いていなかった。

「本当に、馬鹿な子」

クリスは独白するように呟いた。

クリスは戦闘の余波を受け、観戦している自身も怪我をするだろうと予測していた。どれほど体術が優れているようと、簡単に魔法を避けたり防ぐ事は出来ない。特に団長のような魔術を防ぐ事は困難だ。

しかし、クリスは掠り傷ひとつしていない。

理由は簡単だ。魔王がそれを良しとしなかったからである。

魔王は無意識の内に中庭全体を覆うような壁を作っていた。戦闘の間、ずっとである。その上、豪雨で木々や芝生を傷め^{いた}ない様、地面に着く前に蒸発させていたのだ。あの魔法を見た時、クリスは鳥肌が立った。同時に反発する種類の魔法を行使するなど、通常では出来る事ではない。仮に魔族であったとしても。

魔王の暴拳はそれに留まらない。

魔王は、闘っていた相手すらも守っていたのだ。

意識していたのかどうかは分からないが、魔王の起こした豪風の風は逃げるようになっていた。相手に負担をかけない様に魔法を使っていたのである。その上、吹き飛ばした後、魔王のした事に対してクリスは呆れるしかなかった。

（敵を庇うなんて、一体何がしたいのかしら）

魔王は団長を吹き飛ばした後、風をクッションにして衝撃を緩和させていたのである。だから団長は何度吹き飛ばされても、無傷で普通に動けた。魔王自身も無意識に相手を傷つけないよう、手加減をしていたから簡単に背後をとられた。

魔王の神経を、クリスは疑う。

あんな事をしていたら、いつ殺されるか分からない。いくら魔力が強いとしても、あれでは簡単に殺されてしまう。無意識でやっているのであれば、なおさらだった。

（あれじゃあ、危険過ぎて傍にいたくないわ）

そもそも、本気で仕留めるつもりであつたのなら、始めに決着はついていた。

団長を土で閉じ込めるのではなく、串刺しにすればよかったのだから。

それでなくとも、あの豪雨を全て雹にすれば、あっという間に終わった。

だが、魔王はそれをしなかった。あの様子では、思いついているかどうかとも怪しい所だ。それどころか、敵を庇う始末。もはや呆れるのを通り越して、感心するしかない。

「おやおや、保護者さんはこんな所にいたのか」

クリスが振り向くと、そこには団長がいた。クリスは微笑みを浮かべる。

「あら、団長さん」

「クリスさん？　でしたっけ。あなたは全く、恐ろしい人だねえ」

「あら、何の事かしら」

「あのおちびさんから離れた今も、こうして俺の首を狙っている」

クリスは密かに団長の後ろに魔法を展開していた。団長はそれに気付いたのである。

「こうしていなかったら、あなたはあの時どうしたのかしら」

団長は大袈裟に肩をすくめた。

「おお、怖い怖い。さすが北の水使い」

「あら、知っていたのね」

意外そうに見えるよう、クリスは相槌を打つ。

「有名だからねえ。誰にも媚びず、隙あらば誰かれ構わず襲う。美人で、丁寧な言葉遣いをしているが、見た目に騙されると痛い目を見る。国の追手や追及ですら、のらりくらりとはぐらかす。水の悪魔」

クリスは笑みを深める。

「わたしって、そんなに有名だったのね。——ちなみに、いつ気がついたのかしら」

「俺がおちびさんにトドメを刺そうとした時だね」

「あら、始めからわたしの術に気付いていたって事ね」

腕が落ちたかしら、とクリスは困ったように呟く。

「落ちちゃあ、いないだろうよ」

「慰められても、あまり嬉しくないわ」

「慰めたわけじゃあないんだけど。……そう言えば、なぜ、あんたが魔王と一緒にいる」

クリスは微笑む。団長は油断なくクリスを見据えていた。

「やっぱり気付いたのね」

「気付かない方がおかしいだろ。だが、あの魔族は妙だ」

「それはわたしも全面的に同意するわ」

魔王の魔力は他の魔族とは桁違いだが、それ以上に違和感を覚える。

（あの子の性格のせいかしら）

クリスは初めて魔王に会った時を思い出す。

淡々としているようでいて、内心はこれ以上ないほど悩んでいる。興味がないように見せかけて、本当はすごく気にしている。面倒くさいと言いつつも、全力を尽くそうとする。

その上、甘過ぎるほど優しい。
例え、それが敵であったとしても変わらない。
だからこそ――

魔王は近い内に必ず破滅する。

「何を企んでいる」

「あら、なにも企んでいないわよ」

クリスが微笑むと、団長は沈黙した。そして、諦めたように大きく溜息を吐く。

「お前さんと張り合うつもりはないよ。ただ、真意を理解したいだけだ」

「それは無理よ」

にっこりと笑う。

「誰もわたしを理解する事はできないわ」

「……おちびさんでも？」

「当然ね」

嘘。

魔王は本能で気付いている。わたしがどういう人間なのかは分からないだろうけど、何を考えているかは薄々気付いている。

そしてわたしを信頼している。愚かなまでに、真っ直ぐに。裏切る事を疑いもせずに。

だからこそ、クリスは魔王を裏切れない。
だからこそ、クリスは魔王から離れる。

全ては魔王の為に。

「それに、理解してもらおうとも思わないわ」

クリスは背を向けてその場を後にする。

（わたしでは、あの子の性格を直せない）

魔王が本当に危険になった時、クリスが自ら排除してしまう。それでは駄目なのだ。クリスがいなくなった時、魔王は自身を守れない。

（だから、騎士団に預ける）

この国が、魔族をどのように扱うのか知っている。

近い内に、ある魔族の集落がこの街を襲う事を知っている。

でも、魔王には知らせない。

（あの子は変わらないといけない）

あのままでは魔王はいずれ、死んでしまう。

魔王を恨んでいるのは人間だけではないのだから。

あの甘さを、切り捨てさせるために、置いて行く。

（あの甘さがなくなったら、わたしは悲しいと思うかしら）

クリスはふと、そんな事を思った。

第22話（後書き）

おまけ

「ああ、そういえば、魔法を解除し忘れたわ」

クリスは街に出てから団長に仕掛けた魔法を思い出す。

「……まあ、いいかしら。うっかり誤爆したとしても、被害を受けるのはあの人だけだから」

クリスは街を後にした。

ちなみにその時、団長は強烈な寒気に襲われたとか襲われなかったとか。

第23話

目が覚めると、頭痛は回復していた。窓から外を見るが、外は暗い。夜なのだ。

私はベッドから起き上がり、周囲を見回す。柔らかい明かりがあるのに気が付く。

「おや。起きたんですね」

そこには眼鏡をかけた白衣の男がいた。明かりは男の手元を照らすために点けられた蝋燭の様だ。

「ああ」

私は近くに掛けられていたマントを見つめる。身体を見下ろすと、学校指定の制服の姿だった。私はすぐにマントを羽織る。

「おや、隠してしまうんですか？　なかなか面白い格好なのに」

「目立ちたくないから、隠すんだ。それに、面白いからという理由で見世物になるつもりはない」

「だとしたら、服を着替えばいいのではありませんか？」

そんな事は分かっていた。だが、元の世界との繋がりを示す唯一の物が制服なのだ。始めこそは着替えようかと思っていたが、マントを手に入れた今、そこまで着替える必要性も無い事に気付いた。要は隠せば良いのだから。今では自分の存在証明のような物になっている。

「一応、騎士団の制服が支給されていますが……」

「ああ。着るつもりはない」

「そうですか。団長も着せるつもりはなかったようです。わざわざ大きなサイズを持ってきましたから」

それは嫌がらせか？

私の立場を知っているのであれば、着ない事は始めから分かっていたのだろう。机に置かれていた制服を手にとると、明らかに大きかった。これではどちらにしても着れない。暗に小さい、と遠回しに言っているように思えた。被害妄想かもしれないが、団長の場合はそうである可能性が高いように思える。

「……そうになると、やはり嫌がらせか」

「ええ。恐らくそうでしょうね」

私は白衣の男を見た。

「団長の性格をよく知っているようだな。それに、団長のこういった行動にも慣れてるように思える」

初めてここに来た時も、やたらと親しげだったのを思い出す。

「ええ。幼馴染ですから」

意外だった。団長にこんな礼儀正しい幼馴染がいるとは思わなかったのである。もっと粗暴なのを想像していた。偏見だが、類は友を呼ぶのだから。

……そうすると警戒した方が良いのか？

「なるほどな」

私はとりあえず相槌をついた。

「そういえば、団長が呼んでいましたよ。もっとも、こんな時間な

ので起きてはいないと思いますが」

「今は何時なんだ？」

「どうでしょう。ですが、もう多くの人は眠っている時間ですね」

ずいぶんと曖昧な答えだった。

この世界に来てから時間をあまり気にした事がなかったせいか、時間という概念が存在しているのかも分からない。残念な事に、クリスは傍にいないのだ。よって、誰かに聞く事も出来ない。

「そうか。……もしかして、ずっと見てくれたのか？」

「まあ、それが仕事だから」

何でもない事のように男は答える。

「すまない。迷惑をかけた」

「いえいえ、仕事ですから」

私が部屋を出て行こうとすると、男に呼び止められた。

「ちょっと、今から行くつもりかい」

「ああ。嫌がらせも兼ねて行ってこようかと思ってな」

「……なかなか性格が悪いね」

「自覚している」

男は溜息を吐く。

「でも、君もこんな時間まで起きていたら身体に悪い。まだ成長期なんだろう？」

「……………まあな」

高校生は成長期だろうか？ 曖昧に答えるしかなかった。

仮に成長期だったとしても、先程まで十分に寝ていたのである。
今更寝ろと言われても、そう簡単に寝れるものでもない。

「今日はここで寝ていいよ。まだ寮の場所も分からないだろうし」

「あなたはどうするんだ？」

「僕はもう帰るよ」

男はまとめてあった書類を鞆にしまった。

「そうか。ありがとう。迷惑をかけた」

「いえいえ」

男は立ち上がり、明かりと共に部屋を出て行く。私はそれを見送り、しばらくベッドに横になった。しかし、眠気は来ない。私は起き上がり、近くにいた精霊に手を伸ばした。

精霊は淡い緑色をしている。おそらく、団長が使っている精霊だろう。

「なあ、お前は団長に頼まれてここににいるのか？」

私は駄目元で精霊に尋ねる。精霊は何を言っているか理解できないらしく、くると私の手の周囲を回った。しばらく手の平を見つめているかと思えば、私の手の平に横たわるように乗っかる。その精霊はどこか心地良さそうに光りを和らげた。

「……………」

今更気が付いたが、精霊に懐かれるようになっていた。それは少し嬉しいが、理由が分からない。そもそも、魔族は精霊に嫌われて

いるはずだ。

（まあ、いいか）

私は深く考えない事にした。暇潰しに精霊を観察する。

精霊は鳥の姿をしていた。小鳥、というよりも雛と表現した方が正しいだろう。丸い身体。未発達の翼に、身体中を覆っているふわふわと柔らかそうな羽。

（ふむ。間違いなく、鳥だな）

他の精霊はどんな姿をしているのだろう、ともう片方の手を伸ばすが、精霊は反応を示さない。やはり個体差があるようだ。理由は全くわからないが。

手の平でぐっすりと眠る精霊を見ると、私も眠くなってきた事に気付く。しかし、この状態で寝るとなると精霊を潰してしまうだろう。朝起きて、精霊の死骸を見るのは嫌だった。死骸が残るかは分からないが、いなくなったとしたら、私は自分が潰したと判断してしまう。

（……起きているしか、ないのか？）

たまにはいいか。

私は横になり、精霊を観察し続ける。精霊は可愛い寝顔で寝ていた。

（これは……食べる気にはならないな）

私は口元に笑みが浮かんでいたが、その事には気が付かなかった。

第23話（後書き）

寝る子は育ちます。少なくとも、私はそう信じて眠っています。

第24話

目を開けると、朝だった。結局あのまま眠ってしまったようだ。精霊の乗っていた手を見るが、そこに精霊はいない。寝ている体勢は変わってないので、潰してはいないと思う。

帰ったのか。

私は精霊の乗っていた手を握ったり開いたりした。精霊がいた時のような感触は当然しない。軽く息を吐いて、身体を起こす。周囲を見回し、異常がない事を確認した。立ち上がって身体を伸ばす。目を擦ってから、マントの下の制服を適当に整えた。服にシワが出来ていたとしても、見えないため気にしない。

「起きたか」

声の方に目を向けると、団長がいた。私は机の上に置かれていた、騎士団の制服を団長に突きだす。

「おい、これは嫌がらせか？」

「ああ、悪い悪い。お前に合うサイズがなくてな。適当に引っ張ってきたら、それだったんだ」

「やはり、嫌がらせか」

団長は苦笑した。

「ま、そうなるな。——そんな事は置いておくとして、朝飯に行こうか」

「……私はお金を持っていない。よって、団長のおごりと受け取る

ぞ」

私は団長を見上げる。団長は笑って私の髪を掻きまわした。

「大丈夫だ。騎士団は無料だ」

「そうか。それはありがたいな」

私は団長の手を払う。団長は残念そうな顔をする。

「なんだよ。昨日は普通に撫でさせてくれたのに」

「昨日は……あれだ。私が負けた立場だから、あえて好きにさせただけだ」

目を逸らしながら言うと、団長はふうん、と呟いた。

「だが、今日は駄目だ。だいたい、髪の毛がぐちゃぐちゃになるじゃないか」

「元々ぐちゃぐちゃだろ？」

「くせ毛なんだ」

「どう見ても、寝癖だ」

「……………」

私は手櫛で乱れた髪を適当に整える。

「……櫛、貸してやろうか？」

「一応、忠告してやるが、私の髪は絡まりやすくてな。そこら辺の適当な櫛だと、簡単に歯が欠ける。そうでなくても、背の部分が折れたりしたりするんだ」

「ふむ。俺より酷いな」

団長は懷に入れていた手を戻す。

私がある程度、整え終えたと団長が歩きだした。

「さて、さっさとメシを食いにいきますか」

もしかして、待っていてくれたのだろうか。頼んだ覚えはないんだが。

そんな意味を込めて団長を見上げるが、団長の関心は完全に朝ご飯に移ったらしい。まあ、深く考えても仕方ない。私も朝ご飯を楽しむにする事にした。

朝ご飯は洋食だった。別に和食じゃなくてはいけない訳ではない。ただ、気持ち的にご飯が懷かしく思えるのだ。私は一日中、パンでも平気である。ただし、それが一日ならという限定が付く。お米が大好き、という訳ではないが、あの食感と味が味わえないとなると寂しかった。

もっとも、それが現在の食事に影響するかと言えば、関係はない。

「……女なら、もう少し大人しく食えよ」

団長の呆れたような声が聞こえる。

「ふぁにふぁふぁ？」

「口に物を入れながら喋るな」

団長に言われ、咀嚼していた物をしっかり噛み、嚥下する。

「なにがだ？」

団長は呆れたように私を見た。

「そんなに大口を開けて食うなよ。誰もお前のメシを取らねえよ」

「これは癖のようなものだ。気にするな」

「気にするって。普通よりも大きいだろ、口」

「確かによく言われるな」

そして言った後、なぜか毎回苦笑されるのだ。

ちなみに朝食はパンとスクランブルエッグとウインナーとサラダだ。いたって普通だった。どうやら食べ物に関しては、元の世界と違いはないようである。

「気にしろよ！」

「ご飯中に叫ぶな。周りに迷惑だろ」

団長は言葉に詰まった。

私は気にせず食べ続ける。出された物は、嫌いな物であろうと全て食べる主義だ。

「ところで団長」

「なんだ」

「なぜ野菜を、そんな隅に追いやるのだ」

団長の皿にある野菜サラダは、見事に隅に追いやられてる。誰が見ても、野菜は嫌い宣言をしているのは丸分かりであった。

「嫌いなんだよ。文句あるか」

「ない。しかし食べないのならば、私がいただくが？」

私は団長を見る。団長はちょっと引いていた。

「お前……仮にも女なら、他人の食いモン奪おうとするなよ」

「違う。これは捨てられゆく運命の野菜を、有効に活用するための手段だ。団長も嫌いな野菜を食べなくて済む上、私も少し得した気分になる。誰かが損をしているか？ 否！ 全員、得をしてるではないか！」

私の力説に、団長は苦笑しながらサラダを私の皿に移した。

「うむ。感謝する」

私はおいしくサラダをいただく。

「……味付けなしで、よく食べれるな」

「野菜独特の味が引き立って、美味いではないか」

「いや……そういうなら、いいけどよ……」

魔族だからなのか、と団長は呟いている。

「これは私の好みの問題だ。魔族になる前から、こうだったぞ」

「……あまり人前で自分が魔族とか言うなよ」

私は周囲を見回した。しかし食堂にいる人々は、誰もこちらを気にしていない。

「大丈夫だ。問題の所は空気の振動を限定している。団長にしか聞こえていない」

「……よく意味は分らんが、とりあえず他に聞こえていないならいい」

団長はサラダの分だけ、私よりも早く食べ終えた。それでも私が食べ終わるのを待っていてくれるらしい。私は団長の視線を気にせず、食べ終える。

「ごちそうさま。ふむ、やはり美味しい食べ物を食べると気分が良いな」

「そうか。さっさと返しに行くぞ」

「む。そうか」

私はコップの水を一気に飲み干す。団長の後を追うように急いで立ち上がった。器を返す際に、調理室に向かって「ごちそうさん」と呟く。聞こえたらしい職員が「はい。ありがとね」と返してくれた。

第24話（後書き）

ずいぶんとスローペースに進みます。

ちなみに、髪の毛に関しては作者の実話です。櫛、折れます。背の部分から折れる時は、櫛を持っている手が痛くなります。

第25話

「それで、どこに行くんだ？」

私は先を歩く団長に並んで尋ねる。

「とりあえず、基礎体力と魔力の検査だな」

「魔力も検査するのか？」

理由は理解できるが、魔力の検査は避けたいのが本音である。

私の魔力は今の所、この世界で一番多いと考えられている。だが、それが正確な数値などで割り出されてしまうと後々困る気がする。考えたくはないが人間と魔族が争う時、私は魔族側につくだろう。私のデータが敵側にあるのは不利になる可能性がある。

「いや、魔力の検査はしなくていい。検査なんてしたら、正体がバレちまうだろ。適当な数値でも書いておくから、代わりに魔力制御の訓練をする」

「魔力制御？」

クリスが言っていた魔力漏れの事だろうか。

「お前は無意識に魔法を使い過ぎだな。しかも無意味に規模が大きい。あれじゃあ、あつという間に使えなくなっちまう。今後のためにも必要な事だろ？」

「それは構わないが、それでお前たちが得をする要素はあるのか？ 私は魔力を制御できて助かるが、そちらにしてみれば厄介な敵に塩を送るようなものだろう」

「敵に塩を送るの意味が分からんが、とりあえず俺たちと一緒にい

る時に魔法を暴発でもされたら困るんだよ」

それは確かに遠慮したい所だ。

つまり？魔法を制御できていない私？という存在は、大きな爆弾のようなモノなのだろうか。なるほど、危険物だな。

「なるほどな。それなら別に構わない。早くやろう」

魔力の制御というのは魔法の特訓のようなものだろう。少し楽しみだ。

「今、向かっているんだっての」

「うん。知っている」

団長は疲れたように溜息を吐いた。

昨日、団長と闘った中庭に案内される。

「ここでやるのか？」

「とりあえず、体力検査だけな。まあ、簡単に言うなら俺を魔法を使わず倒せて事だ」

私は体術を使えないと教えたはずだ。そもそも簡単な体力測定だと思っていたのに、実践だとは。引っ掛けもいい所だ。

めんどくせえ。

顔に出ていたのだろう、団長がにやりと笑う。

「どうした？ 魔法が使えない状況の時、お前はどうするんだ？」

「そんなの決まっているだろう」

「ん？」

私はにやり、と笑った。

「速攻で逃走する」

団長が呆れた様な目をこちらに向けた。

そんな目で見られても、出来ない物は出来ない。そもそも私のいた国で武器とか体術とか、必要がなかった。下手に人を殴れば傷害罪だし、世間の目が一気に冷たくなる。そのため、危険な状況になった場合は基本的に逃げる事しか教えられない。平和万歳だ。逃げられない状況は想定されていないのが玉に瑕^{きず}だけだな。

団長は私をしばらく見ていたかと思えば、大きく息を吐いた。

「ならそれが、逃げられない状況だとしたら」

「さっさと降参する」

「それが許されない立場なら？」

「……………」

団長の目付きが変わっているのに気付く。私はそこで、ようやく団長が本当に聞きたい事を知った。私は腕を組んで考える。

「……私は、自分の仲間を見捨てられるほど、思い切りがよくない
「ほう？」

「そして、私は仲間を見捨てないでいられるほど、強くはない」

「それで？」

「決まっている」

私はにやり、と笑う。

「全員で逃走だ」

団長は無言で私の頭を殴った。頭に音が響き、一瞬、何も考えられなくなる。気が付いた時には、頭を押さえていた。

「い、痛いじゃないか」

「お前は馬鹿か」

「仕方ないじゃないか。他に浮かばない。そもそも、そんな状況になる前にさっさと退却してっ」

再び頭に強烈な音が響く。

「最悪の状況を想定するのが、上の役割なんだよ。それなのに何だ？ 逃げる事しか考えていないじゃないか」

「いけないのか？」

私は頭を押さえながら団長を見上げる。

「じゃあ聞くが、そうやって敵に背中を向けている間、相手は待ってくれると本気で思うのか」

私は俯いて沈黙する。

「魔法を使って守る事も出来ず、かといって身体を張って守る事も出来ない。むしろ邪魔な荷物だ。そんな軽い気持ちで王なんて宣言してるんなら、いい笑い者だな」

反論できなかった。

確かに強制的に王にされたが、そんなものの周囲には関係がない。王と名乗っているなら、私は王なのである。仮にここで「私は好きで王になったわけではない」と言った所で、失望されるだけだ。個人的に失望されるのは構わないが、私は魔族の王として見られてい

る。つまり、私は魔族の代表として見られているのだ。私が失望される事は、魔族全体が失望されるのと同義。本当に厄介な立場だ。

「……………」

「どうした？ やっぱりその程度だったのか？ 魔王なんて、大した事ないんだな。やっぱり子どものお遊びか」

なんか今、少しカチンときた。頭に少しずつストレスが蓄積されていくのが分かる。いつもは溜まらないように、適当に気を逸らしているが、今回は出来なかった。

反論しようとしてない私に、団長が更に追い打ちをかける。

「おい、なんか言ったらどうなんだよ。やっぱりお前はただの餓鬼だな。いや、大嘘吐きの餓鬼だな。大人を困らせて、何が楽しいんだ？」

その言葉に、なにかが吹っ切れた。

「……黙っていれば、人の事をよくも知らずに勝手に勝手にぐちぐちと……私はな、そうやって、ぐちぐちネチネチ言われるのがな」

顔を上げて団長の腹に思い切り蹴りを入れる。

「大っ嫌いなんだよ！」

団長はそれを見越していたのか、私の蹴りを腕で防ぐ。その行動が更にムカついたため、突風を付加して団長を壁まで吹っ飛ばした。

「ざまあ見ろだ」

第25話（後書き）

キレました。気が長い様に見えて、実は短気です。

第26話

やってしまった。

思わず心の中で呟く。後悔はしていない。むしろ、すっきりしている。自分を褒めたいくらいだ。だが、個人これと魔王それとは話が別だ。立場が違い過ぎる。顔には出ていないが、冷や汗が止まらなかった。

（いや、あれは団長がわざと喧嘩を売って来たんだ。そして私はそれを買った）

団長を吹っ飛ばしてから冷静に考える。むしろ、吹っ飛ばしたからこそ冷静になった。

（例えば喧嘩を売られたからと言って、買っていい訳ではない。これではむしろ逆効果だ）

そこまで考えて、ふとある事に気付く。

（……私、なんでこんな真面目に考えてるんだ？）

いつもであれば、適当に手を抜いて対応するはずなのに、今回に限って出来ていない。頭に血が上ったとしても、普段であれば適当に流していたはずである。暴力で訴えるなんて、私らしくない。

（なんか、この世界に来てから調子狂うな……）

私は体勢を立て直している団長を見つめた。団長はほとんど無傷の状態で立ちあがっている。団長と呼ばれるだけの事はあるらしい。

「それが、お前の答えなのか」

「私、個人としての答えだな。もっとも、それ以前に、団長の言い方にムカついた」

「なんだと？」

「どう考えても、私に喧嘩を売っていたよな。勿体ないから、わざわざ買ってしまったではないか」

団長は私に呆れた様な視線を向ける。

「私が子どもである事は認めよう。――いや、それ以前に読みが甘過ぎる事も認める。だが、それがなんだ。私一人では、ここまでの限界なんだ」

「限界だったとしても、それ以上を求められるのが上としての立場だろう？」

「そうだな。だが、別に一人でやる必要もないだろう。考えるのが得意な奴に聞けばいいんだからな」

団長は訝しげに私を見た。

「物事には相性というのが存在するんだぞ」

「そんな事は知っている」

「だったら、相性の良い奴に頼ればいいじゃないか」

「……………」

「頭脳労働は苦手なんだよ」

団長は大きく溜息を吐いた。

「だったら、肉体労働に強くないとな」
「ん？」

団長は私の元まで歩き、再び拳を振り下ろす。私は咄嗟に後ろに下がって回避した。

団長は微笑む。私の背中に悪寒が走る。私の足は知らず、少しづつ後退していた。もちろん、団長も徐々に私ににじり寄ってくる。

「ああ、そうだ。魔法を使わない様に制御リングを付けるのを忘れていたな」

「……なあ。もしかしくなくても、怒っているのか？」

「反則されて、怒らない奴がどこにいるんだ」

私は即座に背を向けて逃走を図った。しかし、団長は私の腕を掴んで逃走を阻止する。私はぎこちなく背後を振り返った。そこには当然、笑顔を浮かべた団長がいる。

「……い、一応、提案なんだが、こう……身体を動かすよりも、魔力を制御するの優先した方がいいと思う。ほら、さっきみたいに、うっかり出さないためにも、とてもいいと思うぞ。うん」

団長の笑顔は変わらない。

「そ……それに、私は……だな、体力と柔軟以外は運動なんて全く駄目なんだ。だから、その……激しい運動は、ちよつと……」

「ちよつと？」

「……………分かりました。やります」

提案は受け入れられなかったようだ。潔く諦める事にする。

団長は懷から腕輪を取り出し、私の腕に付けた。団長が取りだした時は私の腕には大きかったが、腕に付けると丁度良い大きさに縮む。思わず腕輪を凝視してしまう。

腕輪の幅は広く、銀色をしていた。装飾の類は一切なく、女が付

けるにはあまりに素っ気ない。辛うじて模様が刻まれているが、あまりにもシンプルな物だった。個人的には派手よりは地味な方が好きなので、全く構わないが。

「これは？」

「制御リングだ。どうだ？」

どうだ、と言われても変化は感じられない。試しに火の玉を出してみるが、普通に使う事が出来た。

「……普通に使えるが？」

「そりゃあ、そうだろ。完全に抑えるモンでもないからな。若干、魔力の消費が多くなっているくらいだ。まあ、一回なら普通に使えるだろうよ」

今度は風を起こしてみた。手の平で小さな渦巻きを作る。特に違和感を感じられない。

「……特に変わっていないように思うが？」

「個人差はあるからな」

「この意味はあるのか」

団長はにやり、と笑った。

「これ付けてやるなら、魔法ありでもいいぜ」

「それなら喜んで付けさせてもらうが……構わないのか？」

「いいぜ。むしろ、じゃんじゃん使えよ」

怪しい。ひたすら怪しい。

こんな虫のいい話がある訳がない。そもそも団長は私に対して怒

っているはずである。そもそも、なぜ魔法を使う許可をするのか。魔法抜きで体力検査をするのではなかったのか。

（絶対、裏がある）

極力、魔法の使用は控える事にする。だが、魔法の使えない私など、運動神経の鈍い、ただの高校生だ。体力測定で標準以上になった事はない。

正直、魔法が使えないとなると厳しい。コテンパンにされる想像しか出来ない。

（魔法を身体に纏わりつかせればいいのか？）

例えば、団長の糸のような魔術にしても、風を利用した武器だった。それを身体を覆う様に使ってみたら、どうなるのだろうか。大規模な技ではないと思うから、特に問題はないだろう。魔力の消費も抑えられるはずである。

「どうした？ かかってこないのか？」

「もう始まっているのか？」

「鈍いねえ。なら、こっちから行っちゃうよ？」

団長は練習用の剣を、中庭の隅に置かれてた樽から抜く。

「ちょっと待て。私は素手だぞ。武器を使うのか？」

「嫌ならお前も使えばいいだろ」

顎で樽を示される。樽は剣の入っている物だけでなく、斧、槍、弓矢が入った物まであった。だが、素人が武器を持った所で満足に使えるはずがない。

「嫌がらせか？」

「純粹な提案だよ」

嫌がらせ決定。

どちらにしても、私の頼れる武器は魔法だけだ。

「ちなみに、あんたは魔法使うのか？」

「いや？ こいつで十分」

それだけが唯一の救いだ。こっちは万全でないのに、あの趣味の悪い魔術なんて使われたら困る。

「――で、素手で良いのか？」

「構わない。どちらにしても、持った事がない物を振り回すのは危険すぎる」

「賢明な判断で」

口ではそう言いつつも、風で形を作る。

私が風で作った形は、箆手のような物だ。腕全体を覆うように風を纏わりつかせる。外側に向けて少し膨らませたそれは、一見すると盾の様にも思えた。

（私としても、魔法の幅を広げるための訓練になるな）

私は地面を蹴って、団長に迫った。

第26話（後書き）

主人公は新しい技を習得した。

……といっても、これまでは大技ばかりで、ようやく下級魔法を覚えた様なものです。順序が違うだろ。

ちなみに「魔法」と「魔術」の線引きは、魔族では明確にされていますが、人間は明確に線引きしてません。そのため、表記に揺れがあります。

第27話（前書き）

訂正「風で形作ったのが間違い」↓「風で作ったのが間違い」

第27話

飛び込んだはいいが、私はある事に気付く。私の動きが鈍くなった瞬間を逃す事なく、団長は剣を突き付けてきた。私はそれを風の籠手で防ぐ。模造刀は嫌な音を立てながら粉碎された。

「うっかりしていたな」

これで殴っていたら、団長は即死だろう。気が付いてよかった。

「……お前は俺を殺す気か？」

「そんな訳ないだろう」

おそらく風で形作ったのに問題があるのだ。風で形を作るなら、その形の中で風を循環させなければならない。風は空気の流れなのだから。結果的に、触れる物を全て切り裂く籠手になってしまったのである。

風で作ったのが間違いだったのだ。私は風ではなく、何も考えず、普通に籠手を想像する。その籠手で中庭の木に触ってみるが、特に異常は起こらない。

「すまないな」

「素直に謝れば全てが許されるとでも思っているのか」

団長は樽から再び模造刀を取り出す。その目が据わっているように見えるのは、気のせいではないだろう。

「思わないが、悪い事したら謝るのが当然だろう」
「そうかよっ」

団長は素早く斬りつけてきた。私はそれを箆手で受け止めるが、箆手では剣が滑る事に気付く。そのまま剣を振り払い、団長に拳を突きつけた。

「……なんで寸止めなんだ？」

「実際に殴る必要はないだろう」

私は団長の顔面に当たる直前で、拳を止めていた。団長は不機嫌そうに私の拳を叩き落とす。

「だとしても、だ。拳の握りが甘過ぎる上に、腰が入っていない。それじゃあ、誰も殴り飛ばせないぜ」

「別に殴り飛ばす必要はない。牽制できれば十分だろう」

「その考えが、甘過ぎるんだよ」

脇腹に鈍い痛みを覚え、反射的に後ろに飛び退く。痛む脇腹を腕で押える。

「不意打ちとは卑怯ではないか」

「油断しているそっちが悪い。一応、手加減はしているんだぞ」

女だからな、と団長は剣を構えた。一瞬で団長の雰囲気が変わる。

「無駄話はここまでだ」

団長は一蹴りで私の懐に入り込む。私は後ろに飛び退くが団長はそれを許さず、模造刀で突きを放った。私はそれを箆手で受け止めるが、踏ん張るので精一杯だ。反撃に転じる事も出来ず、そのまま後退する。団長の攻撃は終わらない。後ろへと私を追い込みながら、

斬撃を放っていく。下から切り上げ、返す刃で振り下ろす。横薙ぎ、袈裟切り。私はそれらを辛うじて受け流す。受け止める事はできない。腕力が違いすぎる。剣の軌道を変えることしか出来ないのだ。後ろに下がろうとして、背中がなにかにぶつかった。感触からして壁だろう。私は団長の攻撃を受け流しながら、横へとずれる。しかし、そこで何かが変わるわけでもない。団長は変わらず斬撃を繰り出す。何度も籠手でいなが、実際はもう限界だった。重い斬撃を何度も受けているのだ。腕はすでに痺れており、持ち上げるのが精々だ。

「どうした。動きが鈍くなって来たぞ」

言葉を返す事すらできない私に対し、団長は余裕すら見える。腹立たしい、などと考える余裕すらない。本当に剣をいなすので精一杯なのだ。

（舐めるな）

私は団長に突風を叩きつける。しかし昨日とは違い、団長は吹き飛ばされる事はなかった。私の注意が逸れた事に気付いた団長は、それを見逃す事なく私の肩に剣を振り下ろす。刃が潰されているのにも関わらず、鋭い痛みが身体を突き抜けた。

「――」

私は即座に後退し、肩を押さえて蹲る。だが、視線は団長から離さない。

「その気概は買ってやる。だがな、実力が全然ないんじゃないか、意味がないな」

私は団長を睨みつける。団長は自身の手首を指で軽く叩いて示した。

「お前さんのそれ、結構効果があっただろ？ 弱い魔法は普通に使えたが、強い魔法になると一気に弱くなった。まあ、それでも不意打ちなら十分飛ばせるくらいの力だったが、使いモンにはならないな」

「……裏がある事は分かっていた」

「そうかい。だが、それが何なのか気付けなかったんなら意味ねえな」

読みが甘い、と言いたいのだろう。そんなの私自身が一番痛感していることだ。

「まあ、もっとやりたいトコだが、ここまでにしといた方が良さそうだな。腕、満足に動かせないんだろ？」

私は答えない。これ以上、醜態をさらしたくはなかった。

団長は苦笑いを浮かべる。

「強情だねえ。ちゃんと医務室行けよ？」

「分かっている。……ついて来る必要はない。道は一応、覚えている」

私は立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。肩は押さえているが、痛みは表情に出さない。もちろん、不安定に歩くなど論外だ。いつもよりもずっと遅いが、自身の弱みをさらけ出すよりはいい。

それほど遠くない筈の道程が、いやに遠く思えた。

「はい、湿布です。しかし、あなたのような子どもに全く手加減をしないなんて、一体なにを考えているんでしょうね」

眼鏡をかけた白衣の医師から湿布を手渡される。私は仕切りとして使われているカーテンの奥へと移動した。そこでマントを脱ぎ、制服の首元を緩める。

私の学校の制服はブレザーだった。首元が窮屈ではあるが、基本的に規則は守っている。そのため、ボタンは全て閉じていた。上着を脱ぎ、軽く結ばれている群青色の紐を抜き取り、ようやくシャツのボタンを緩める。団長に強く打たれた肩の方を引っ張り、覗こうとするが、やはり見えない。肩を押して確認するが、痛みを感じなかったため、場所を特定する事も出来なかった。

私は軽く溜息を吐く。

「すみません。打撲がどんな感じか見えないんで、見てもらってもいいですか」

久しぶりに制服を脱いだからか、口調が以前のものに戻りかけている。気を抜きたくはないが、今更口調を戻すのも面倒だった。

「いいですよ」

医師は微笑む。

私はシャツを引っ張り、医師に見せる。

「ずいぶん強くやられましたね。ですが、もう治りかけていますよ。触っても、少し痛いだけでしょう?」

私は痛みを考えないようにする癖があるためか、痛みに鈍感だ。

だから気付けなかったのだろう。しかし、打僕はそんな簡単に治るものだろうか。

疑問が顔に出ていたらしい。医師は微笑みを浮かべる。

「知らないのですか？ 魔族は傷の治りが早いんですよ」

私は咄嗟に医師から距離を取った。シャツを直し、医師を睨みつける。彼は苦笑いを浮かべた。

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ」

信用できない。

やはり気を抜くのは危険だと、私は痛感した。

第28話

「一応聞くが、なぜ私が魔族だと思った」

私は医師を油断なく見据える。彼は何事もなかったかの様に微笑みを浮かべた。

「服装が変わっているからです」

「……これは私の故郷の服装であって、魔族とかは関係ないんだが」
「ええ。なので、引っ掛けです。冗談のつもりで言ったのですが…

…素直ですねえ」

自分で墓穴を掘ったようだ。クリスの時も自分で墓穴を掘ったような気がする。学習能力がなさすぎる、と自分で自分に呆れた。

「それで、私をどうするつもりなんだ」

「なにも。団長もそうなのでしよう？」

「魔族としては扱っていないな」

団長は変わり者だと思った瞬間だ。魔族で、しかも魔王とされている人物を捕らえるでもなく、そのまま放置し、さらには騎士として鍛えようとしている。酔狂な男だ。

「なるほど、あの人らしい」

「……団長を信頼しているんだな」

私は、この世界の人々がどのように魔族を扱うか知っている。もっとも、そんな目に遭ったのはクリスしか知らない。しかし、あの強烈な拒絶反応を見る限り、ほとんどがそうであると考えた方が良

いだろう。

「ええ、頑固ですから。言った所で聞きません」

信頼というよりも諦めに近いらしい。だとしても、そんな団長を放置しても良いと考える程度には、信頼しているのだろう。

そんな事を思っていたら、ふと疑問が出てきた。

「……他に私の正体に気付いた人はいるのか？」

「おそらく僕と団長くらいですね。他の団員は毛色の変わった見習いが入った程度にしか思っていないでしょう」

「毛色の変わった？」

この世界では特に黒色の髪が珍しい訳ではないはずだ。身長も標準くらいである。違いと言えば、肌の色が黄色っぽいだけだ。顔立ちも少し違うかもしれないが、気になる程度でもない。

「見慣れない風貌をした、幼い上級魔術の使い手。それだけでも十分注目の的です。それに加えて団長直々に手ほどきを受けているのですから、注目するな、という方が難しいですね」

「そうなのか？ そんな視線は感じなかったが」

もっとも、私はそういった空気に疎い。元の世界で性格は隠していたが、人目など滅多に気にしていなかった。なので私は余程あからさまでないと気付けないほど鈍感なのだ。

医師は苦笑を浮かべた。

「そうですか。それは何よりです」

私はカーテンの奥に戻り、服装を整えてマントを羽織る。ちなみ

に、湿布は貼らなかった。

「たぶん、何度かここに来る羽目になると思う」

今日だけであの訓練が終わるとは思えない。そもそも、あの類の物は毎日しなければならぬはずだ。そうすると、かなりの頻度で来る事になるだろう。私の運動神経の悪さを侮る事なかれ。おそらく毎回やられっぱなしだ。全然自慢にならないが。

「そうならない様に努力してください」

「当然だ。やられっぱなしは性に合わない」

私は医務室を出て団長の元へと向かった。

廊下を歩いていった団員に団長がどこにいるか聞くと、団長室だと教えられる。私は礼を言って団長室へと向かう。団長室の場所は覚えていなかったが、淡い緑色の精霊が足跡の様に一定の方向に向かっていている事に気付く。淡い緑色をした精霊を辿っていくと、団長室を見つける事が出来た。

「入るぞ」

「ノックぐらいしろ」

ノックもせずに団長室の扉を開ける。団長は執務の机に向かい、書類と戦っていた。

「それで、次は何をするんだ」

そうだな、と団長は考える。

「適当にその辺の奴を捕まえて、寮の場所でも聞いておけ。持ち物

は全部そこに置いておけばいい」

「わかった。その後はどうする」

「そのまま今日は寝とけ」

ずいぶんと投げやりに答えられる。書類の仕事が忙しいのだろう。

「そんな適当でいいのか？ 私は一応、魔族なんだぞ？」

「少なくともお前さんは危険じゃないさ。制御リングも付けたままだし、大して問題は起こせんだろう」

私は肩をすくめる。

用はそれだけだったので、早々に団長室を出た。廊下を適当にうろつく。暇そうな騎士を探しているのだが、なかなか見つからない。仕事中なので当然だ。

空を見上げると、太陽は真上に差しかかっている。昼が近い。ふと、太陽に違和感を覚える。しばらく眺め、ようやく気付いた。太陽の傍に寄り添うように、小ぶりな黒い球体の物があるのである。

（よく溶けないな）

異世界だから元の世界と違っていても、おかしくはない。

「……………異世界、か」

本当にこれは現実なのだろうか、と何度も考えた。その都度、考えていても変わらないと自分を諫める。夢であろうと現実であろうと私は今、ここにいるのだから考えるだけ無駄というものだ。

「さっさと魔族を救うしか帰る方法もないんだよな」

そこまで考えて思考を停止させる。

（考えるだけ無駄だ。今はとにかく目先の事だけ考えろ）

考えてはいけない。その先を考えてはいけない。

心の奥底で危惧し続けている事を、心の中でも言葉にしてはいけない。言葉にした瞬間、私は進めなくなる。

（なにも考えるな）

それが問題を先延ばしにする行為であったとしても、今は考えてはいけない。

（立ち止まるな）

前を向いて進め。盲目的に信じろ。それさえ達成できれば全ては元に戻るのだから。

第28話（後書き）

P o s i t i v e t h i n k i n g .

考えても始まらない時は、問題を棚上げにして、とりあえず前に進む主人公でした。

第29話

――三日後

私は団長の繰り出す刃を籠手でいなす。毎日打ち合っているため、だんだんコツを掴んできた。力任せに防ぐのではなく、剣の腹に手を軽く添えて少し軌道をずらすだけ。それを最小限の動きで避ける。これのお陰で、余分な力を込める事なく効率的に避ける事が出来るようになった。

私は団長の腹部を軽く触れる。その一点に集中して突風を起こす。団長は即座に飛び退くが、それでも避けきれなかったのだろう。団長は軽く顔を顰めていた。

「ようやく、一撃を喰らわす事が出来たな」

団長の言葉に、私はそっぽを向いて答える。

「そうだな。だが、まだ全然だ。ようやくまともになった、という程度だろう」

「最初は酷かったからな」

「そうだな。まあ、制御リングに慣れてきたからな」

私は手首の制御リングに目を落とす。団長は苦笑した。

「あーあ、もう簡単にお前さんを転がす事が出来なくなっちゃまったな」

この三日の間、私は何度も何度も団長に叩き潰されている。魔族は体力も回復しやすく、怪我の治りが早い。そのおかげで、今日ま

でなんとか出来た、という所だ。元の状態であつたのなら、とつくに根を上げていただろう。

「毎日、何度も転がされたらさすがに意地になる。もっとも、私が嫌がっても何度も引きずって強制的に転がすつもりだっただろ」

「当然だな」

「だったら、心が折れる前に必死になるしかない」

正直ギリギリだった。今日、叩き潰されていたら完全に心は折れていただろう。そうになると、私は今この場にいなかったかも知れない。

団長は頭を掻いた。

「だとしても、俺に勝つのはまだ早いかな」

団長は剣を構え、再び斬撃を繰り出す。私は避けきれないものだけ、手を添えていなす。ほとんど剣は見えていない。というより、見えない。勘で動いているのだ。

（頭で考えたら、動けなくなる。何も考えるな）

私は団長の足元の地面を押し上げる。バランスを崩した団長の剣を、籠手に風を纏わせて粉碎した。そのまま団長の足の膝に回し蹴りを入れるが、逆にこちらの足を払われる。

「うわっ」

受け身を取る間もなく頭を打った。一瞬、頭が真っ白になるが、即座に立ち上がる。

「おいおい、武器破壊の上に足払いだよ」

「こうでもしないと、勝ち目はないだろ」

「確かにな」

団長は柄だけになった剣を弄ぶ。私は何度も瞬きをして、視界を回復させる。

「今日はここまでしておくか」

「そうか。いつもより短いな」

私は腕に纏っていた魔法を解く。身体全体に張っていた薄い膜の魔法も取り払った。本格的に訓練が開始してから作った、防護魔法だ。衝撃を緩和してくれるが、ないよりはマシ程度のものである。要するに、弱い。致命傷のみを防ぐように構成しているから、当然である。これのお陰で、何度か危うい攻撃を防いでいた。

「ああ。ちょっと今日は面倒な事が起こりそうなんだな」

「そうなのか」

私は団長の後ろをついて歩く。

騎士団の中での私の立場は、複雑なものだ。私は騎士団の中で、唯一の暇人である。というのも、団長が私に仕事を回さないためだ。私が毎日している事といえば、街の巡回と団長直々の訓練のみ。団長直々の訓練にしても、二時間ほどこか時間がなかった。なのでそれ以外は、街を適当にふらつき、街の人の声に耳を傾けているのが常だ。

だが、これといって大した情報はなかった。正直、期待外れだった。所詮、噂なんてそんなものか、とも思う。今では完全に暇潰しだ。

私は騎士団の服装をしていないので、街中で騎士と見られる事はない。騎士として見られないのは構わないのだが、少年と勘違いされてガラの悪い連中に絡まれるのには困った。見た目が華奢な男の子に見えるらしい。マントで下の服を隠しているから、勘違いされても仕方ないのだが、あまりにも回数が多かった。目立つのは避けたかったので、そういう類の人々からは逃げる事に徹している。

「騎士も大変なんだな」

そのため、団長の言葉を聞いてもどこか他人事だった。実際、他人事である。だから、次の言葉を聞いた時は耳を疑った。

「今日はお前も出てもらう」

私は思わず足を止める。団長は気にせず先を進んでいくため、私は団長を急いで追いかける羽目になった。

「ちょ、ちょっと待て。一体どういう風の吹きまわしだ」

「人手が足りないって最初に言っただろ。俺相手に一撃喰らわせるなら、騎士として出しても十分だ」

本気だったのか、と思う。三日も放置に近い扱いを受けていたため、冗談なのかと思っていた。

団長はにやり、と笑う。

「いい加減ただメシ喰らいも、心が痛んできた頃だろ」

「残念ながら、そういった事に私の良心は痛まない」

「そうかい」

団長は苦笑を浮かべる。

「それで、一体なにをしろと言うんだ」

「ああ。――魔族の討伐だ」

私は何を言われたのか分からなかった。立ち止まる団長を、見上げる。団長は何かを試すかのように私を見ていた。

しばらく団長を見つめ、私はようやく口を開く。

「つまり、私に同族を追い払えというのか」

「違うな。討伐、と言った。残らず全て、殺せ」

「嫌だ」

元は団長たちと同じ人間ではあったが、異世界人である私にとっては、どちらも大して違いはなかった。実際、魔族も人間も変わらないのだ。

「その魔族がこの街を襲うと言ってもか？」

私は団長を睨みつけた。

「人間が魔族に襲われるのは自業自得だろ。少なくとも私はそう思っている」

「平和的交渉を求めているのか？」

平和的に交渉を求めるのならば、意見の違う奴等をどうにかしろ、と言っているのだろう。確かに、これでは交渉を求めても、始めから門前払いになる。

私は覚悟を決めた。長い息を吐く。

「分かった。その代わり、その件は私に任せてくれないだろうか」

「無理だな」

「……だろうな。だから他の騎士たちよりも、一足先に行かせてくれ」

団長は鼻で笑った。

「魔王さまが直々に交渉すると？」

「そうだ」

「失敗したら」

私は拳を握る。

「私が、決着をつける」

どれだけ強く握っても、震えが止まらなかった。

第29話（後書き）

ようやく動き出します。

第30話

ニルの街を出て、私は東の森へと向かう。そこに魔族が集結しているらしい。

らしい、というのは確証はないためである。彼らが街を襲撃する、という話も今日になって分かった事だからだ。相当、綿密な計画なのだろう。直前になるまで悟らせない程、彼らは本気なのだ。

私は制御リングを撫でる。

私は団長とのやり取りを思い出した。

「お前が決着をつける、だと？」

「ああ。騎士団が手を下すくらいなら、私がやる」

震えの止まらない私の腕を、団長は一瞥した。

「それは、本気で言っているのか？」

私の事を魔族がどのように認識しているのか、本当は知らない。正しくは、知ろうとしなかった。その付けが今、回ってきたのである。

始めから召喚された時に、自分がどう思われているのか聞けば良かったのだ。そうでなくとも、他の魔族の態度を見れば自ずと知れた。魔王として見ている人もいれば、むしろ私を憎むように見ていた人もいたのだから。それを思えば、つまり、私は最初から名ばかりの魔王なのだ。

実を伴わない、名ばかりの魔王。魔族の都合の言い様に踊らされる、ただの駒。

それに怒りを覚えない、と言うのは嘘になる。恨むさ、当然。だ

が、異世界の無関係な人を召喚してでも、魔族は平穩を求めた。

その平穩は私が思っているのとは違うのかも知れない。
本当は人間を全て排除して欲しいのかも知れない。

それでも、召喚されたのは私なのだ。それならば当然、私の好きな方法を取らせてもらう。

そのために、私は名を失った。

そのためだけに、私は自分の存在証明を失ったのだ。

（本当は違う。そんな事は知っている）

そう思っていないければ、私は自分を見失う。

「本気だ。当然だろう。私を誰だと思っている。私は――魔王だ」

団長はしばらく私を見つめた。その表情はいつもと違い、真剣だった。だから、目を逸らす事は絶対にしない。内心ではどれだけ逃げたくても、絶対に逃げない。

「……いいだろう。ただし、作戦開始時間までだ。それ以上は待たない」

「ああ。それでいい。団長、感謝する。ありがとう」

私は頭を下げた。団長は私の手首を示す。

「それは外していくと良い。いざという時、邪魔になる」

私は自身の腕についている腕輪を見た。腕輪を押さえ、私は首を振る。

「いや、これは本当に危なくなるまで外さない」

「好きにしろ。それは外そうと思えばいつでも外せる。――魔族は東の森に集まっているそうだ」

団長は背を向けて歩き出す。私は団長に一礼し、団長とは反対の方向へと走り出した。

ようやく見えた東の森は、豊かな土地だった。一步足を踏めば、地面がやわらかい弾力を持っているのが分かる。いわゆる緑の匂い、というのを肌で感じ取れる森だった。

あいにくと私の生まれ育った街は地面をコンクリートで固められた地域である。その中で緑といえば、等間隔に植えられた街路樹。そして排気ガスを吸わせるためだけに植えられた常緑樹のみだ。本来の植物の姿はテレビの映像でしか知らない。

（異世界に飛ばされて、初めて緑と触れ合うと言うのも妙な話だ）

私はいわゆる、都会っ子だったのだ。だが、車の排気ガスが漂う街の中で暮らしていた事もあり、地味に体力はある。まあ、違うとは思うが、そう思っておく事にしていた。

「……それで、どこに行けばいいのだろう」

魔族が集まっているという東の森に来てみたものの、具体的にどの辺りにいるのかが分からない。だが、歩き慣れない場所を歩き回っても時間の無駄だろう。私は狼に姿を変える。確認のために自らの姿を目で確認できる範囲で確認した。やはり黒い毛並みをしている。左の腕に嵌められている腕輪は狼サイズになって嵌まっていた。

それ以外は特に問題はない。

私は身体の調子を確認するのも兼ねて、周囲を見回しながら歩く。鼻を嗅ぎ、森とは違う臭いを見つけた。私はその方向へと走る。

狼の足は速かった。目まぐるしく景色が変わっていく。こんな状況でなければ気分が良くなっていただろう。楽しむ機会はまた今度に取っておく。

走っていくと、広場のように拓けた場所を見つけた。私は速度を落とし、草むらに隠れる。魔族の姿を確認する事は出来なかったが、少なくとも大勢いる事は鼻で確認出来た。

（ここだ）

私は元の姿に戻る。心配していた頭痛は、今はまだない。制御リングを着けてからは上級魔法をほとんど使っていなかったのだ。だから、どれくらい使えば頭痛がするのか、全く分からない。

どうしたものか、と考える。交渉をするならば、姿は見せなければならぬ。問題は、私の魔族としての魔力だ。魔力が全て漏れ出してしまえば、ニルの街は大混乱になるだろう。尋常じゃない魔力なのだから。

（制御リングは魔力が外に出るのを抑えているんだよな）

つまり、私の魔王としての魔力も多少は抑えられるのではないだろうか。しかし、抑えられるのがどの程度かは分からない。

私は目を凝らして、身体全体を包み込むようにしているコートを見た。

（確か、魔力は光りとして見えていたよな）

コート、と思い浮かべたのだから覆っている生地は分厚い。

（だとしたら、それを薄くすれば良いのか？）

そこまで考えて、思い留まる。

（待て待て、それならそれは最終手段にするべきだろう。一度、この姿のまま、魔族たちの前に出ればいい。ダメだったら覆っているコートの生地を薄くすればいい）

一度、人間として魔族の前に姿を見せるのだ。

だが、もし問答無用で襲いかかってきたら？ 同じ魔族だと分かったとしても、襲いかかってきたら？ 私の立場は本当に微妙なのだ。

（考えても始まらないな）

いつまで経っても、これでは決まらないだろう。

覚悟を決める。私は草むらの陰から立ち上がり、魔族の前に姿を現した。

第31話

魔族はとつくに私の存在に気付いていたらしく、全員がこちらを見ていた。まだそれほど集まっていなかったのか、十ほどこいらない。不思議と姿が似通っており、全員がいわゆる獣系の魔族だったのだ。狼の顔をしている者、猫の耳と尻尾を持つ者など獣の一部を持つ人の形をした魔族。熊や鷲など動物の姿をしている魔族。言葉で表すと和むような光景に思えるが、それぞれが殺伐とした雰囲気を出しているため、とても和めるような状況ではない。

「何者だ」

魔族の中で一際大きな熊が声を上げた。人ではなく完全な獣形で、黒みを帯びた茶色の毛並みをしている。低く、厚みのある声だった。

「あんたたちを説得しに来た」

熊は二足で歩きながら私を見下ろし、微かに目を細める。

「何のために」

「何の為とか、そんな事はどうでもいい。あんたたちの事は騎士団に筒抜けだ。このままでは返り打ちに合う。その前に、さっさと逃げた方がいいだろう」

私の言葉に魔族たちは色めき立った。しかし熊が手を上げると一瞬で鎮まる。騎士団に直前まで悟らせなかった事と言い、統率はとれているようだ。

「その話が真実だとして、なぜお前は我々に知らせた」

熊は油断なく私を見据える。熊の後ろにいる魔族たちは、いつでも私を襲えるように構えていた。私は手首の制御リングに手を乗せる。まだ、外さない。

「こう見えても同族なんだな」

私はコートを微かに薄くし、魔族としての気配を出す。熊は息を飲み、わずかに後ろに下がった。他の魔族たちは硬直し、表情を引き攣らせている。

（出し過ぎたか？）

私はすぐにコートを元の厚みに戻した。魔族たちに安堵が広がる。

「信じてもらえるだろうか」

「そうだな、信用しよう。だが、我々は曲げるつもりはない」

「なぜ。このままでは無駄になるだろう」

熊は鼻で笑った。後ろの魔族たちからも並々ならぬ覚悟を感じられる。

「お前にはわからんだろうさ」

「どういう意味だ」

「——お前はゴリアたちに召喚された者だろう。憐れな者だ。そんな半端な存在が、我々を理解しようとするなど、愚かな事よ。お前の世界がどんな世界であったかは知らん。だが、お前の世界でも流儀があるように、我らの世界にも流儀がある。我々はそれを貫き通すだけ。例え、それが無駄な事であったとしても、だ」

この魔族たちは、私の言葉を信じた上で計画を実行すると言う。敵わないと知った上で、敵に向かっていくのだと言う。私にはその

考え方が理解出来なかった。

「無駄と分かっている、なぜ向かう。騎士団は皆殺しだと言っていたんだぞ。なぜ、そこまでする」

熊は愚問だ、というように笑う。

「我々の未来のため。現状を変えるためだ」

「死んでしまえば、現状を変える事なんて出来ないと思うが？」

「我らの意志を継ぐ者が現れるだろう。そうすれば、いつか、誰かが大きな事を起こすだろう。我らはいわば、布石のようなものだ」

くだらない、と私は思った。

私には決して理解出来ない考え方だ。命を捨ててまで貫き通す意志。そんなものは、生きてこそ通るものだと思う。

けれど、それを口に出す事はしなかった。くだらないと思う一方で、彼らの心構えを素直に尊敬したからだ。しかし、そんな彼らを冷めた目で見ている自分がいる事に気付く。やはり、それとこれとは別なのだろう。私は制御リングを外した。

「そうか。だけど、私はあなたたちの考えに共感できない。悪く思わないで欲しい」

「交渉決裂か？」

「ああ。だから実力で行かせてもらう」

私は魔族たちを一気に宙へと持ち上げる。空を飛べる者は籠で囲い、飛べる範囲を限定した。魔族たちは驚いているものの、冷静である。

熊は挑発するように笑った。

「俺たちが大人しくやられるとでも？」

「まさか。だが、こんな場所で騒ぎを起こしたくはない。場所を変えよう」

私は鴉に姿を変え、空高く飛び上がる。ニルの街からも、森からも離れた位置に山脈があった。丁度良い、と私はそこまで一気に運ぶ。意外と距離があったが、問題はない。

ゆっくりと山の麓に彼らを下ろす。私も元の姿に戻った。

「噂には聞いていたが、本当に桁外れなんだな。なるほど、確かに『魔王』と呼んでも言い過ぎではないな」

私は周囲に透明な壁を作る。空から戻ろうとしていた鷲の魔族が壁に当たり、体勢を崩していた。すぐに持ち直し、下にいた魔族の肩に留まる。

「こんな大規模な魔法と上級魔法を一気に使うとはねえ。その身体のままだと、ずいぶん負担が大きいんじゃないか？」

「さあな。最初の方はそうだったけど、慣れてきたみたいでな。そう簡単にはへばらない」

魔族たちは戦う態勢に入っていた。私は長い棒状の物を想像する。棒の長さは私の身長の二倍ほどだ。とりあえず、適当に振り回せば当たる長さでもある。

（そういえば、魔族と戦うのは初めてだな）

「大勢で寄ってたかるのは好きじゃないんだが、状況が状況だ。手加減はしないぞ」

「覚悟はしている」

足止めで終わらすつもりはない。全員を行動不能にすれば上出来だ。

（まあ、それが出来れば苦労はしないんだが……）
無理でもやらなければいけない。

あー……本っ当にめんどくせえ。

約束してしまった以上、やらなければならないのだ。

（さっさと終わらせて、帰ろう）

心の中で呟き、迫ってくる魔族を見据えた。

第32話（前書き）

ちなみに通常の棒術では180cm以上長い物はないそうです。
長過ぎても危険らしいので、決して真似しないでください。

戦闘描写あり。

第32話

私は手に持っている棒で魔族を一気に横薙ぎする。両手で簡単に振り回せる物ではなかったので、強い追い風も共に放つ。他の人が見たら、ただ腕を大ぶりに振っているようにしか見えないだろう。ほとんどの魔族が棒と風に押し飛ばされ、見えない壁に激突して意識を失う。

残った魔族は三体。鷲の姿をした魔族、兎の耳を持つ魔族、そして熊の姿をしている魔族だ。上出来だ、と内心で呟く。

「必至だな」

「時間がかかると不利になるのはこちらだからな」

この三日間でずいぶん魔法を使う事に耐性が出来たようで、これだけの魔法を連発しても頭痛はない。だが、早く終わらすに越した事はない。

私は棒の長さを自分の身長より少し高い程度まで縮める。長すぎると振り回す事自体が難しい。かといって、短すぎると意味がない。短くするくらいであれば、箆手の方が使い慣れている上、やりやすい。

私は空から急降下してくる鷲を、強風で下から煽り、軌道をずらす。目的としていた位置を遥かに越えてしまったため、体勢を立て直すためにも鷲は再び上昇した。私は一先ず鷲を後回しにし、兎の魔族に棒を突きだす。しかし、視界の内に微かに見えた黒い影を反射的に薙ぐ。熊の魔族である。

熊の魔族は腕で棒を防ぐと、棒を掴んで強く引く。咄嗟に放す事も魔法を解く事も出来ず引き寄せられてしまう。私は身体全体を守るような半円形のシールドを想像する。振り下ろされた腕はシエ

ルターで防ぐ事が出来たが、シエルターは強い圧力を受けてミシミシと嫌な音を立てていた。

（どんな馬鹿力だよ）

私は棒を崩し、代わりに箆手を形成する。だが、熊相手に効くとは思えない。私は体勢を立て直すために、後ろに跳躍しようとして――バランスを崩した。

左の足に植物の蔦が巻きついているのである。私は咄嗟に蔦を引き剥がそうとして手を伸ばした。

（ちくしょう、燃やせば……）

蔦はあっという間に蒼い炎に包まれる。私は横から迫ってくる腕を見て、熊の身体全体――特に肩を突風で押し飛ばした。吹き飛ばされはしなかったものの、不安定な体勢となったらしく、後ろへと後退する。

その事に安堵していると、腕に鋭い痛みが走る。

「いっ……」

鋭い爪がマントと制服を突き破り、肌に赤い筋を何本も作った。気が逸れたその一瞬で、再び足が拘束される。今度は両足である。私は狼へと姿を変えて拘束から抜け、即座に駆け出す。腕が痛んだが、気にしている場合ではない。獲物へと一直線に駆け抜ける。狙うは兎の魔族。

私は兎の魔族に飛びかかった。相手を押し倒した瞬間、突き抜けるような強い痛みと共に、横へと勢いよく吹き飛ばされる。

私は痛みを堪え、姿を戻す。そこから鴉へと姿を変えようとして、失敗した。翼のみが生えた状態で、上手く空を飛ぶ事が出来ない。

それでも辛うじて空を飛ぶ事が出来た。

鷲が鋭い鳴き声を上げて急降下してくる。私は咄嗟に突風を吹かせ、鷲の体勢を崩す。下へと逸れた鷲を後ろから掴み、スタンガンを想像しながら軽く電撃を浴びせて気絶させる。

私自身も高度を保つのが限界だったのか、徐々に地面へと近付いていく。当然そんな隙を見逃してくれるはずもなく、熊が待ち構えていた。

私は嚇しの意味も兼ねて、足元に蒼い炎を起こす。しかし熊は引く事なく私を見据えている。

（やばっ）

私は必死に羽ばたこうとするが、当然無理だった。咄嗟に熊の足元にポツカリと大きな穴を開ける。突然の事で熊も対応しきれず、落下してしまう。それなり深さがあるため、そう簡単には戻ってこないだろう。

地面に足を着け、鷲をそつと横たわせる。立ち上がった瞬間、何本もの鷲が身体に巻きついて動きを拘束した。地味に傷に障って痛む。

私は身体に巻きつく鷲を一気に燃やし、兎の魔族へと目を向ける。兎の魔族の足元から竜巻を発生させた。兎の魔族は直前に気付いたのか、咄嗟に飛び退き、そのまま遠くへと離れる。そのため、吹き飛ばされる事はなかった。

（甘いつ）

私は再び兎の足元から竜巻を起こす。再び避けようとするが、今度の物は先程よりも範囲が広いため逃げる事は出来ない。そのまま上空へと吹き飛ばし、衝撃を抑えながら地面へと叩きつける。起き

上がってこない事を確認し、安堵の息を吐く。

私は熊の落ちた穴に近付き、中を覗き込んだ。穴は熊の倍ほどの高さの深さがあり、熊は何度も登ろうとするが上手くいかないらしく、爪の跡を残しながらずり落ちていく。

「……残りはあんただけだ」

出た声は思っていたよりもずっと弱弱しかった。

熊は悔しそうに、何度も穴から登ろうとする。しかし努力は実らない。爪の跡を残すだけだった。

「どちらにしても、あんたたちはもう戦えるような状況じゃない。大人しくそこに入っててよ」

「……魔法も存在しないような世界の異世界人に負けるつもりはない」

「あ、そう」

正直、疲れた。

今回はまだ頭痛がない。だが、今までよりも遥かに大規模で強い魔法を使っているにも関わらず、頭痛がないのは妙な事でもあった。

（まあ、運が良かったと思っておこう……）

私はその場に座り、熊の様子を観察する事にした。嫌がらせではない。万が一、出た時に対処するためである。

（そういえば、最初の一撃喰らった人たち、大丈夫かな？ まあ、寝ていてくれるなら助かるけど、打ち所が悪かったら大変だし……）

頭の中が徐々に靄がかってくるのに気がついた。眠くなっている

のである。ふと思い出し、私は脇腹を手で触れた。念のため、ブレーのボタンを外してシャツを持ち上げて様子を見るが、大きな痣になっていただけでそれほど重症でもないようだ。防護魔法のお陰である。私は念のために森に入ってから、ずっと防護魔法を使っていたのだ。つまり、あの攻撃は致命傷になりえたのだろう。

私は赤く染まりつつある腕を見る。むしろ、こちらの方が重症だ。いや、それよりも――

「……これ、絶対に直らないよねー」

私は制服の傷の部分をつまむ。赤く染まり、どのように破れているかは分からないが、恐らく修復する事はできないだろう。

「制服……高いのに……」

私は地面に倒れ込み、そのまま意識を失った。

第32話（後書き）

ここに来てようやく魔王さまの能力の高さを出す事が出来ました。
ギリギリだったけどね。

最後の方は魔王さまも無意識の内に口調が戻っています。必死だったんだよね。

戦闘描写、がんばりましたがいかがでしょうか。ご感想、ご意見、ダメだしでもなんでもいただきます。よろしければください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880w/>

クリア-スペル（魔王編）

2011年10月20日20時52分発行